

2016年10月3日

みずほディーラーズアイ (2016年10月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 95.00 ~ 104.00

国際為替部 為替営業第二チーム 山本 一暁

■ 先月の為替相場

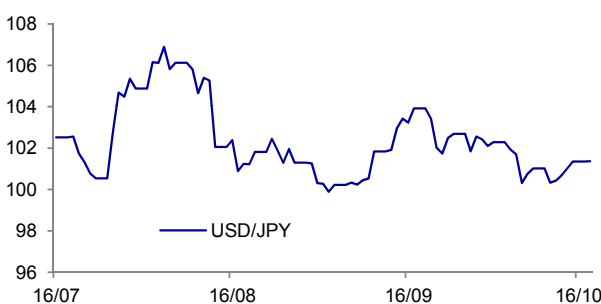
9月のドル/円相場は徐々に上値を切り下げても、節目の100円手前では底堅さを見せた。月初、103円台前半でオープン。米8月雇用統計は非農業部門雇用者数、失業率、平均時給のいずれも市場予想比弱い結果となったことから一時102.80円まで下落するも、9月FOMCでの利上げ期待残存から米債10年債利回りが上昇し、104.32円まで連れ高となった。翌週、浜田内閣官房参与の「9月日銀金融政策決定会合では追加緩和は行わないほうがよい」との発言が意識され103円台前半まで売り優勢となり、米8月ISM非製造業景気指数が市場予想を大きく下回ると、ストップロス巻き込みながら101.20円まで下落。ただし、政策金利据置きを決定したECB理事会後のユーロ/円上昇にドル/円も連れ高になると、週末にかけては複数のFRB高官のタカ発言が相次ぎ103円台を回復する場面も見られた。12日週、ブレイナードFRB理事の講演内容がハト派と受け止められ101.42円まで売りが先行。しかし、本邦の40年国債発行との報道に102円台後半まで急反発すると、翌週の日銀金融政策決定会合に向けた追加緩和期待を背景として103.35円まで続伸した。しかし、原油先物相場が下落し、リスク選好度が低下する流れに102円近辺まで売られた。19日～20日は日米金融政策決定会合を控え、101.50～102.00円近辺でレンジ内推移。21日、日銀金融政策決定会合では政策金利が据え置かれた一方、「イールドカーブコントロール付き量的・質的金融緩和」と「オーバーシュート型コミットメント」が新たに導入され、発表直後、ドル/円は101円台半ばから102.79円まで急騰。しかしながら、当該政策パッケージの解釈及びその実効性が判然としないうちに、一旦売られた本邦10年債がすぐに買い戻されると、100円台半ばまで売り戻された。22日東京時間未明、FOMCでも政策金利据置きが決定され、100.10円まで続落するも、月初の弱い米経済指標を受けて米利上げ期待が大方剥落していたことから、ドル/円は下げ止まり、その後は100円台でのレンジ推移。26日、独最大手銀行株が急落しリスク選好度が低下し、主要株式相場の軟調推移する中、100円台後半から一時、100.09円まで下押されるも、同水準では押し目買いが見られすぐに100円台半ばまで反発。その後、OPEC非公式会合にて減産合意がなされ原油先物相場が上昇し、リスクセンチメントが改善すると、米4～6月期GDP(3次速報)が市場予想を上回ったことから買い戻し優勢となり101.84円まで上昇する場面も見られたが、徐々に利益確定の売りに押され一時100円台に反落後101.42円を越月した。

■ 今月の見通し

今月のドル/円相場は、引き続き底割れリスクを抱えながら、上値の重い展開を予想する。目先のイベントとしては11月8日に投票日を控える米国大統領選の行方が注目されよう。10月4日には副大統領候補による討論会、10月9日・19日には2回目、3回目の大統領候補による討論会が予定されている。いずれの候補もドル高に対する懸念を表明しており、どちらが勝利してもドル/円相場にとってはポジティブ材料とはなりにくだろう。初回討論会では準備不足と映ったトランプ候補が巻き返すようなこととなれば、その政策運営はより不透明感が強いだけに、相場に対してはネガティブ材料になりそう。7日(金)の米9月雇用統計をはじめとして3日(月)のISM製造業景気指数、5日のISM非製造業景気指数などの米重要経済指標は確認すべきではあるものの、今月内にFOMCは開催されず、来月のFOMC(11月1日～2日)はイエレンFRB議長会見がなく政策金利引き上げを予想する向きが少ない。そのため、個別の経済指標の強弱で相場に大きく方向感が出ることは考えにくい。多数のFRB高官の発言も予定されており、こちらも同様に確認すべきではあるが、「12月FOMCはライブである」との足許のトーンからよほど大きな変更がない限り材料にはなりづらいと考える。本邦についても、今月内に日銀金融政策決定会合は開催されず、日銀関係者による発言も予定されていないことから材料不足感是否めない。それゆえ、改めて前月会合時に導入された「イールドカーブコントロール付き量的・質的金融緩和」ならびに「オーバーシュート型コミットメント」の効果を見極めることになろう。前者についてはマイナス金利が本邦金融機関収益に与える悪影響を緩和するための善後策の意味合いが透けて見え、量的緩和継続との整合性が不明瞭である。また、後者については、いわゆる言葉のあやとしか考えられず、期待インフレ率上昇へ寄与するとは想定できない。つまり、日銀による金融政策の限界が意識され、それが根本的にドル/円相場の上値を押さえる要因と考える。また、各国の緩和マネーに支えられ歴史的な高値圏にある主要株式相場であるが、欧州金融リスク、トランプリスク、中国リスクが燦々然と、調整局面を迎えることも懸念され、こちらもドル/円の下押し要因となろう。仮にショートカバーが進む場面では102～103円にある日足一目均衡表の雲がレジスタンスとなる一方で、本邦輸入勢や機関投資家の買いが控える99～100円水準をブレイクした場合には底割れするリスクが大きいと言えよう。

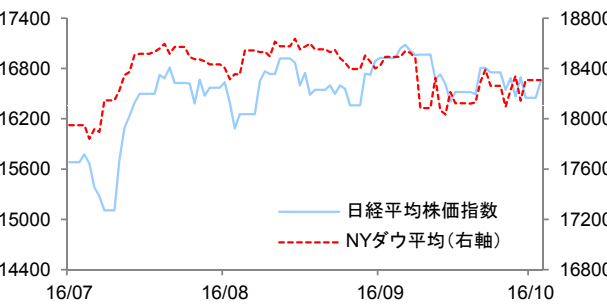
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	ISM製造業景況指数	8月	52.0	49.4	52.6
9/2	非農業部門雇用者数変化	8月	180k	151k	275k
9/2	失業率	8月	4.8%	4.9%	4.9%
9/2	平均時給(前月比)	8月	0.2%	0.1%	0.3%
9/16	CPI除食品・エネルギー(前月比)	8月	0.2%	0.3%	0.1%
9/21	日銀金融政策決定会合	新たな金融緩和の枠組みを発表 0.25%-0.50% 0.25%-0.50% 0.25%-0.50%			
9/22	FOMC				

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル・ブル (3名、99.00～105.00、中心99.00～104.50)

藤崎	99.00 ～ 105.00	年内米利上げ観測が残り、投機筋のポジション巻き戻しにより円安方向への戻りを試す展開を予想。10月は円投勢の外貨投資が旺盛なイメージあり。相場水準は概ね平価であり、ネガティブ金利継続によりM&Aに動く本邦企業も相応に出るのでは。
加藤	99.50 ～ 104.50	日銀がマーケット参加者の材料から剥落する一方、FRBは12月に向けて利上げを行う可能性が残されている。原油価格は比較的安定推移しており、独銀絡みのニュース等でドル/円相場が二桁を見ればそこは絶好の買い場と見るべきだろう。
佐藤	99.00 ～ 103.50	最近の米経済指標は、市場予想を上回るケースが多く、米景気の底堅さを確認している。独大手銀行の経営不安や伊金融機関の不良債権問題等、外部要因でリスクオフ地合いに傾く可能性は残存するが、米12月利上げの可能性が意識される中では、ドル/円の下押しは一時的に留まり、底堅く推移しそうだ。

■ドル・ベア (8名、97.00～103.00、中心98.00～103.00)

山下	97.00 ～ 102.00	FOMCメンバーによる米11月利上げ期待を高めるための発言が続くも、ドル独歩高を避けたい当局としては、世界的に金融緩和が進む中で12月利上げずら難しい状況。拮抗している米大統領選挙による政治的リスクにも鑑みれば、ドルは買い進めづらい。
矢野	98.00 ～ 103.00	日米金融政策を消化後、次のイベントは米大統領選に視線が移っている。カレンダー要因として米大統領選前に利上げが行われるとは見ておらず、今月は上値の重い展開を予想。独大手銀の経営不安などリスク要因も重しとなろう。
高田	98.00 ～ 103.00	ドットチャートの下方修正は継続的な利上げを見通し難しくしており、米債利回りが低迷する環境下、積極的なドル買いは見込み難いであろう。仮に堅調な米経済指標から利上げ観測が台頭すれば一時的にはドル/円が上昇するだろうが、米大統領選挙を控え上値は限定的か。
西島	98.00 ～ 103.00	米金融政策では年内利上げ観測が中々高まらないだけでなく、来年以降の持続的な利上げにも懐疑的な見方が散見される状況下、ドル高トレンド再開を期待する向きは限定的。米大統領選を控え、欧州でも独大手銀行の経営問題など不透明感漂う中でドル/円は上値の重さが目に付く相場展開となりそう。
尾身	97.00 ～ 103.00	年内米利上げ路線、原油価格の安定がドル買い基調を後押ししているが、ランプリスク、独金融機関の財務不安などが大きく相場を押し下げる場面が見られると予想。特に100円割れでのリスクセンチメントの悪化は年初来安値更新の最後のチャンスとなりそうだ。
下山	97.00 ～ 103.00	日米の金融政策を考えればドル買いや円売りが積極化する可能性は乏しく、また米大統領選挙を巡る不透明感や独大手銀行の財務懸念などはリスクセンチメントを押さえよう。ドル/円は下目線で臨みたい。
西谷	99.00 ～ 103.00	足許、底堅さが見られる中、急激にリスクオフが進行しない限りは大きくレンジを切り下げる可能性は低い。但し、米12月利上げ織り込みは徐々に低下しており、また来年以降も非常に緩やかなペースでの利上げが想定される中、ドルを積極的に買う材料には乏しく、上値の重い推移を予想する。
森谷	98.00 ～ 103.00	翌月に米大統領選挙を控えており、今月はFED高官によるタカ派な発言、良好な米国経済指標が示された場合でも米利上げ期待は盛り上がりづらいだろう。ドルが積極的に買われづらい地合いとなる中、次第に上値を切り下げる展開を予想する。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0900 ~ 1.1350
EUR/JPY 110.00 ~ 116.00

国際為替部 為替営業第二チーム 西島 洋行

■ 先月の為替相場

先月のユーロ相場は、ECB理事会後にやや強含みを見せる場面はあったものの、ユーロ/ドルは1.11~1.13のレンジ内での揉み合いに終始する展開となった。

月初1日、ユーロ/ドルは1.11台半ばでオープン。米8月ISM製造業景気指数が49.4と予想ばかりか節目50をも下回る結果にドル売り優勢となり1.12台まで上昇。2日、米8月雇用統計にて非農業部門雇用者数・失業率・平均時給ともに小幅ながら予想を下回りドル軟調地合いから一旦1.12台半ばまで上昇。然しながら悲観視するほどの結果ではないとの見方も出る中、相場は反転し1.11台半ばまで下落した。

5日は、独8月サービス業PMIやユーロ圏8月サービス業・総合PMIの悪化を嫌気し、ユーロ売りが拡がるとユーロ/ドルは1.11台前半まで軟化するも、6日には米8月ISM非製造業景気指数の大幅な悪化を受けたドル売りを背景に、7日にかけて1.12台後半まで上伸。8日、注目されたECB理事会で金融政策の現状維持が発表され、更にドラギECB総裁の会見において追加緩和に消極的な発言が見られるとユーロ買いが強まり、月高値1.1328まで上昇した。その後、米金利上昇を受けたドル買いに1.12台前半まで反落。9日は、FRB高官の利上げに対するタカ派的な発言にドル買いが優勢となり一時1.12割れまで下落する場面があった。

12日から15日にかけてはブレイナードFRB理事のハト派姿勢や米8月小売売上高などの冴えない米経済指標などを受けて米9月利上げ観測が遠く中でドル売り地合いが続き、ユーロ/ドルは1.12台での底堅い値動きに終始。16日は堅調な米8月消費者物価指数(CPI)を受けて米金利が上昇する流れに1.11台半ばまで下落。

19日から20日は日米金融政策イベントを控えて1.11台半ばから1.12付近での揉み合い。21日、日銀が金融政策の枠組み変更を決定し一時的にドル/円が上昇したタイミングではドル買いに押され、月安値1.1123をつける。その後、FOMCにて政策金利の据え置きとドットチャートの下方修正が発表されると、ドル売り優勢の展開から1.12近辺まで急反発。22日もユーロ強含みから1.12台半ばまで上昇するも、一段と上値を追う展開とはならず。

26日以降は、ドイツ銀行が証券化商品の不適正販売を巡り米司法部から巨額和解金要求を受けた問題に端を発し、欧州金融機関への懸念が高まるとユーロ相場は軟調地合い。ユーロドルは1.12付近でやや上値の重い値動きを続け結局1.1245で越月した。

■ 今月の見通し

今月のユーロ相場は方向感に乏しい値動きが続くと見られ、揉み合い前提であるもどちらかと言えば上値の重い展開を想定しておきたい。

先月は日米金融政策決定会合に比べECB理事会への注目はやや控え目であった印象。9月ECB理事会では現行の金融政策維持が決定された一方、QEの期限延長もなくドラギ総裁が日先の追加緩和の必要性を否定したことはややサプライズ。一時的に月高値をつけるなどユーロが強含む場面はあったものの、9月の追加緩和を見込む向きは限定的であった中、ユーロ相場の反応は総じて限定的なものにとどまった。10月20日に予定されるECB理事会について、今のところ追加緩和観測が盛り上がっている印象はなく、引き続き現行緩和策の効果を見極めるステージとなりそう。ECBがユーロ相場を大きく左右するイベントになる可能性は今のところ僅少との見方。

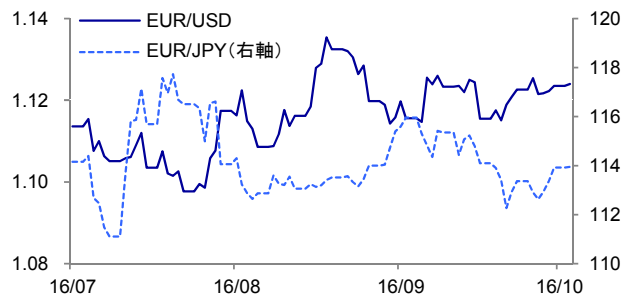
なお、米金融政策では9月FOMCにて利上げは見送られ、年内利上げの可能性を示唆する内容で終えたものの、11月米大統領選を控えていることや、米経済指標も今ひとつ力強さを欠いていることなどから依然として不透明感が残り、金利先物市場における12月利上げ織込みは5割程度にとどまっている。仮に年内利上げ観測が高まろうと、ドル高材料としては2017年以降も持続的に利上げができることが前提であることから、足許でドル買いの勢いが一段と強まる構図は期待し難い。かかる米金融政策動向はユーロ相場を下支えすることになる。

ただし、欧州を見渡すと警戒すべき材料が散見され、ユーロ買い一色となる展開も考えにくい。独大手銀行の米司法部からの巨額和解金要求による資本不足懸念は欧州金融機関全体への懸念に繋がり、ユーロ相場にとってネガティブに作用する可能性が大きい。また、イタリアの憲法改正の是非を問う国民投票は12月4日に実施することが決定。投票結果の動向は非常に不透明との見方が散見される中、否決された場合にはレンツィ首相が辞任し、一時的には政治リスクが高まり英国に次ぐEU離脱懸念が嫌気されるであろう。国民投票日までは世論調査などに一喜一憂しながらユーロ相場を下振れさせる展開に備えておく必要がありそうだ。

以上、ドル高を推進する状況にない米金融政策動向とユーロ売りを誘発しかねない欧州におけるネガティブな材料に挟まれる格好で、ユーロ相場は上値重い相場付きながら上下いずれか一方への値動きになる展開は期待薄であろう。

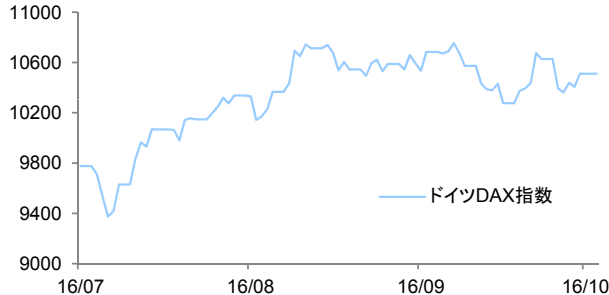
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/2	欧 PPI (前月比)	7月	0.1%	0.1%	0.7%
9/5	欧 小売売上高 (前月比)	7月	0.5%	1.1%	0.0%
9/6	欧 GDP (季調済/前期比)	2Q	0.3%	0.3%	0.3%
9/8	欧 ECB/預金ファシリテート	—	-0.40%	-0.40%	-0.40%
9/13	独 ZEW調査 (期待)	9月	2.5	0.5	0.5
9/19	欧 経常収支 (季調前)	7月	—	31.5B	39.1B
9/22	欧 消費者信頼感	9月	-8.2	-8.2	-8.5
9/26	独 IFO企業景況感指数	9月	106.3	109.5	106.3
9/30	欧 失業率	8月	10.0%	10.1%	10.1%
9/30	欧 CPI予想 (前年比)	9月	0.4%	0.4%	0.2%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ・ブル (2名、1.1000～1.1500、中心1.1050～1.1450)

下山	1.1100 ～ 1.1500	ドラギECB総裁の最近の発言では各国の財政政策への期待が意識され、追加緩和の観測が後退する一方、米利上げ観測は明確には高まっていない印象。欧州金融機関を巡るリスクは意識しておきたいが、欧米の金融政策やユーロ圏の経常黒字を勘案し、ユーロは上目線で臨みたい。
西谷	1.1000 ～ 1.1400	足許、メントピックスが不在となる中、独大手銀行の財務懸念に目が向いている状況であるが、あくまで一時的な動きと見る。結局はFRBの利上げペースが極めて緩やかなものになるとの見方や、ECBの緩和観測の後退を背景にユーロは底堅い推移を見込む。

■ ユーロ・ベア (9名、1.0700～1.1400、中心1.0800～1.1300)

藤崎	1.0700 ～ 1.1300	独大手銀行の経営不安、イタリア大手銀行の不良債権問題、ECBによる追加緩和観測等からユーロの上値が重い展開を予想。年内米利上げ観測は維持されており、米経済指標に異変がなければ、ドル買いの流れとなろう。
加藤	1.0700 ～ 1.1400	独銀の経営不安やイタリア銀行・憲法改正問題等、先行きの不安材料が数多く、ECBによる追加緩和を想起させ続けるものとする。
山下	1.0700 ～ 1.1300	ボンド安に気を良くしたBOEは更なる緩和を示唆しており、欧州銀行問題によるリスクセンチメントの悪化が進めば、ECBは早期の追加緩和を余儀なくされるであろう。
矢野	1.0900 ～ 1.1300	足許では独大手銀の経営不安など欧州銀行リスクが意識されており、センチメントの悪化からEURを買い進める動きは手控えられよう。ECBによる追加金融緩和観測が燦々していることも上値の重しとなろう。
高田	1.0800 ～ 1.1300	先行き不透明な欧州金融セクターに対する不安材料やECBによる追加緩和観測からユーロは上値重く推移するであろう。また財政に関する南欧諸国の不信も燦々しておりユーロは下げ易い展開であろう。
佐藤	1.0800 ～ 1.1350	ECBの金融政策では、拡大資産購入プログラムの実施期限が2017年3月末までと残り6か月になる中、パラメーター変更等の補完措置決定が意識される。一方、米利上げ期待は残存しており、ユーロの上値は重い展開となりそう。
西島	1.0900 ～ 1.1350	年内米利上げ織込みの進捗はうかがえず、米金融政策を背景とするドル高は期待できない点はユーロを下支えする。一方、独大手銀行に端を発する欧州金融機関への懸念が燦々、イタリアでも10月に国民投票を控える状況下ではユーロ買い一色となる展開は考えにくく、ユーロは上値の重い様相が続きそう。
尾身	1.0750 ～ 1.1250	年内米利上げ路線を受けたドル買いにより上値を抑えられる展開が継続しているが、独金融機関の財務不安が一層ユーロ/ドル上値を抑える展開となるだろう。リスクセンチメントが一段と悪化するようであれば、1.1000以下に取引レベルを切り下げること視野に入りたい。
森谷	1.0800 ～ 1.1350	独大手銀行の経営不安をきっかけにユーロ圏経済に対する懸念が高まっており、ユーロは積極的に買われる展開とはなりづらいだろう。米利上げ時期については不透明感が残るものの、ECBへの追加緩和観測が残る中では上値を押さえられると予想。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2700 ~ 1.3400
GBP/JPY 127.00 ~ 135.00

欧州資金部 日比野 杏奈

■ 先月の為替相場

1日、ポンド/ドルは1.31台半ばでオープン。英8月製造業PMIが市場コンセンサスを4ポイント以上上回り、昨年10月以来の高水準を記録すると、ポンドが全般的に買われ、同日の米経済指標(8月ISM製造業、7月建築支出)の弱い結果を受けたドル安にも助長され、ポンド/ドルは1.33台まで上昇。2日の米8月雇用統計の弱い結果を受けドル安が継続し、5日の英8月サービス部門PMIも調査開始以来の前月比上昇幅を記録した事を受けポンド高が続き、1.33台が保たれた。6日に発表された米8月ISM非製造業の弱さからさらにドル安が進行し、同日中に9月高値1.3445まで上昇。

しかし、7日の英7月製造業生産の弱い結果が嫌気されポンド/ドルは1.33台前半まで反落。8日のECB金融政策発表の前後ではユーロが全般的に買われる中でユーロポンドも上昇し、ポンドの売り圧力が継続。13日に発表された英8月CPIの市場コンセンサスを下回る結果、およびBrexitを受けた英大手銀行の人員削減計画の報道などを材料にポンド/ドルは1.32ちょうど付近まで続落。15日に発表された英8月小売売上が市場コンセンサス対比で強い結果となり、英中銀金融政策決定会合では予想通り前回一致で政策金利が0.25%で据え置かれたが、議事要旨で11月の経済見通しが8月と同じであれば大半の委員が年内の追加利下げを支持すると予想していることが嫌気され、ポンドの回復は限定的となった。16日に発表された米8月CPIが市場コンセンサスより全般的に強い結果となるとドルが買われる展開に。また、同日にBrexitの大きな論点となった移民の制約を確保するためにEU単一市場へのアクセス取得をハモンド英財務相は断念する用意があるとの報道を受け、Brexitの英経済へのマイナス影響に対する懸念が再び高まると、ドル高と同時にポンド安が進行した事によりポンド/ドルは1.30ちょうど付近まで下落。

19日の週も英国のEU単一市場へのアクセスをめぐる懸念が意識され続ける中、ポンド/ドルは重い展開が続いた。22日に一時的なドルの買い戻しの流れを受け1.31台まで前半まで値を戻す場面も見られたものの、1.29~1.31台での上値の重たい展開が続いた。

■ 今月の見通し

今月も先月に続きポンド相場はBrexit懸念を主因として上値の重たい展開が続くと予想。Brexit発表直後は2016年後半の英国リセッション入りを予想する市場参加者も見受けられたが、9月前半の英経済指標は市場予想より強い結果のものが多く、結果として2016年英GDPの市場予想が全般的に上方修正されつつある。一方、足許では投機筋のポンドショートも4週間連続で減少しているにも関わらず、9月中のG10通貨の騰落率をみるとポンドがもっとも弱い通貨となっており、またポンドの実質実効レートも下落している。この事は、ポンド相場のメイン・ドライバーはやはりBrexitリスクであることを示唆していると考えられる。

しかし、Brexitをめぐる先行き見通しが9月に比べ大きく変わることは考えにくい。メイ首相は、英政府のBrexitに対する交渉姿勢は実際の交渉が始まるまで明かさないと再三繰り返している。50条の発動について、メイ首相は依然として「2017年初以降」という主張を続けており、それ以上の詳細なタイミングについての言及を避けている。一方で、ボリス・ジョンソン外相は「次回の欧州議会議員選挙が2019年5月に行われるため、英国は(欧州議会選挙の二年前にあたる)2017年5月までに50条を発動すべき」との意見を述べており、50条発動のタイミングについて閣内で未だに意見が割れている状況が近日中に収集がつくことは考えにくい。

唯一Brexitトピックで今月中に変化が期待される点として、メイ首相の独断による50条発動の合法性をめぐる高等法院の見解が明らかとなる。7月初旬にロンドンを拠点とする法律事務所が「(Brexitの)国民投票結果そのものに法的な拘束力はなく、首相が議会の承認を得ずに50条を発動することは違法」との内容の訴訟を英国政府を相手に起こしていたが、この訴訟のヒアリングは10月中に行われる予定(実際のヒアリング開始日程は現時点で不明。10月4~5日、あるいは10月13日との報道がみられる)。仮に、このヒアリングで「違法」との見解が下された場合は、短期的にポンドが買い戻されるだろう。しかし、「EU離脱」を選択した民意を政治家が無視することは考えにくく、高等法院で「違法」との見解が出たとしても結局はポンドの重石となっているBrexitに関する先行きの不透明感が解消されるわけでもなく、中期的にはポンドの上値の重たさは維持されるだろう。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

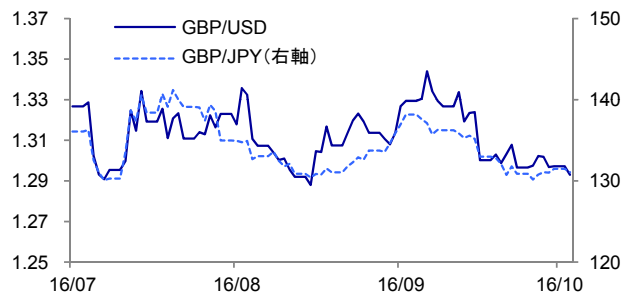
イギリスのクリスマスは家族と一緒に過ごすための祝日という位置づけとなっている。12月に入ると本物のクリスマスツリーを買ってきて、家族で飾りつける家庭も多い。一人から家族のメンバー一人ずつにそれぞれのプレゼントを買うのが一般的であり、プレゼントはクリスマス当日までツリーの下に飾られる。ちなみに、クリスマス直後のチャリティー・ショップは掘り出し物が多くなる傾向があるらしい(クリスマスに要らないものをプレゼントされた人がそれらの品物をクリスマス直後に寄付する傾向があるため)。昨年12月のMoney Advice Trust's National Debtlineの調査によると、英国の一般家庭はクリスマスのために平均£800を支出すると予想された。

24日から帰省する人も多いが、クリスマスイブの24日夜は友人などと過ごす人も多い模様。25日朝に家族全員がそろった状態でそれぞれプレゼントをあげ、その後家族でクリスマス・ディナーをする。「ディナー」というと夕飯を想像するのが自然だが、クリスマス・ディナーはお昼から午後にかけて食べるのが一般的な模様で、なぜ「クリスマス・ランチ」と呼ばないのか不思議。

米国ではクリスマス直後にセールが一斉に始まるが、クリスマスショッピングをするために来英する欧州大陸からの観光客を呼び込むべく、英国では12月初旬からすでにセールが始まるそう。今年はBrexit懸念を巡りポンド安が大きく進み英国国内での買い物が割安になりつつあることを受け、すでに欧州大陸からの観光客による買い物が増えているとの報道もみられる。今年は例年以上の欧州大陸観光客によるクリスマス・ショッピングが期待できるか？

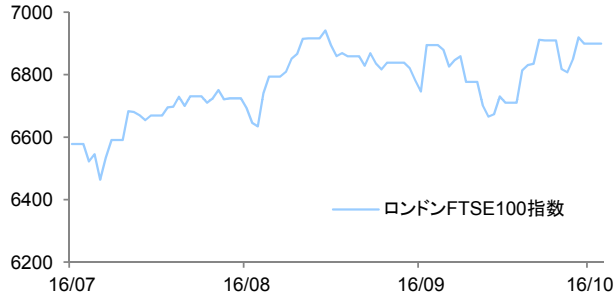
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	製造業PMI	8月	49.0	53.3	48.3
9/2	建設業PMI	8月	46.3	49.2	45.9
9/5	サービス業PMI	8月	50.0	52.9	47.4
9/7	鉱工業生産(前年比)	7月	1.9%	2.1%	1.4%
9/7	製造業生産(前年比)	7月	1.7%	0.8%	0.6%
9/13	消費者物価指数(前年比)	8月	0.7%	0.6%	0.6%
9/14	ILO失業率	5-7月	4.9%	4.9%	4.9%
9/15	小売売上高(含自動車/前年比)	8月	5.4%	6.2%	6.3%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7400 ~ 0.7750
AUD/JPY 75.50 ~ 79.00

シドニー支店 山口 美紀

■ 先月の為替相場

9月の豪ドルは上昇。

1日、豪ドルは0.75前半でスタート。豪4～6月期民間設備投資が予想比良好な結果となり、豪ドルは0.75半ばに上昇。翌日、米8月雇用統計の非農業部門雇用者数が前月比+15.1万人と市場予想同+18万人に届かず、ドル安が進み、豪ドルは0.76台に続伸。6日、豪州準備銀行(RBA)理事会では、予想通り政策金利が1.50%に据え置かれたが、声明文に追加緩和への踏み込んだ内容の記載は無く、豪ドルは0.76半ばに上昇した。更に、弱い米8月ISM製造業景況指数を受けて、豪ドルは0.76後半に値を伸ばした。翌日、豪4～6月期GDPはほぼ予想通りの前年比+3.3%成長となり、豪ドルへの影響は限定的。その後、豪ドルはじりじりと上昇し、8日に9月高値となる0.7732を付けた。

しかし、9日、FED高官よりタカ派(金融引締積極派)な発言が相次ぎ、ドル買いが進行し、豪ドルは0.75後半に下落した。13日、欧米株の下落を背景としたリスクオフの動きに、リスク通貨とされる豪ドルは0.74台に下落。一時、9月安値となる0.7443まで値を下げた。しかし、0.74半ばは約2か月ぶり安値であり、値ごろ感から豪ドルは買い戻され、0.75台に反発。

翌週に入っても、豪ドル買い戻しの動きが続き、豪ドルは0.75後半に続伸。21日、日銀の追加緩和決定を受けたリスクオフの動きや、FOMCでの利上げ見送りを受けたドル売りを背景に、豪ドルは0.76台に上伸。その後、日銀やFOMCの重要イベントを通過して、豪ドルは0.76台中心での揉み合いが続いた。

■ 今月の見通し

「26日(水)の豪7～9月期消費者物価指数(CPI)に注目。」

9月のRBA理事会では政策金利が据え置かれたが、追加緩和に関するヒントは得られなかった。RBAは今年に入り、5月・8月と既に2回の利下げを行い、更に8月RBA四半期金融政策報告書では、RBAが金融政策を運営する上で注視する基調インフレ率が2018年まで目標(+2～3%)以下で推移するとの見通しが示されていることから、追加利下げ観測が燦る。10月26日(水)の豪州インフレ指標発表に注目が集まる。ただし、9月のロウ新RBA総裁は議会証言にて「近年は政策金利の引き下げ効果が減退している」と発言しており、インフレターゲットを下回る指標結果となっても、RBAがすぐに行動する(11月RBA理事会での利下げを行う)かは不明である。

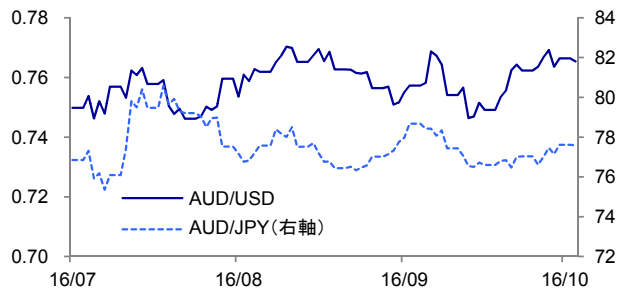
一方、米国では、9月FOMCにて政策金利は0.25～0.50%で据え置かれた。賛成7vs反対3と反対数が多く、メンバー内の意見が大きく分かれたことが窺える。反対票を投じた3名:ジョージ・カンザスシティ連銀総裁/メスター・クリーブランド連銀総裁/ローゼングレン・ボストン連銀総裁、いずれも利上げを主張した。また、声明文では年内利上げを示唆するややタカ派(金融引締積極派)な内容ながら、FRBメンバーによる政策金利見通し(ドットチャート)は従来対比ややハト派(金融引締消極派)となった。利上げ回数は2016年:2回→1回、2017年:3回→2回。長期金利水準も下方修正された。一方、FRBの経済予測は大幅な変更なし。2016年GDPがやや下方修正された程度であり、金融政策判断指標として使われるコアインフレ率予測は前回数値がほぼ踏襲された。強弱入り混じる内容となったが、金融市場はドットチャートの下方修正を材料視し、米株高・米債利回り低下・ドル安で反応している。

追加緩和観測が燦る豪州(豪ドル売り)と利上げ観測が高まりづらい米国(ドル売り)の綱引き合戦となり、豪ドルは横ばいを予想する。下値目処は200日長期移動平均線0.7415、上値目処は8月高値0.7760及び9月高値0.7743近辺とみる。豪ドルは0.7400～0.7750近辺でのレンジ取引となろう。

10月の豪州注目指標は、RBA理事会(4日)、8月小売売上高(5日)、8月貿易収支(6日)、9月雇用統計(20日)。7～9月期CPI(26日)。

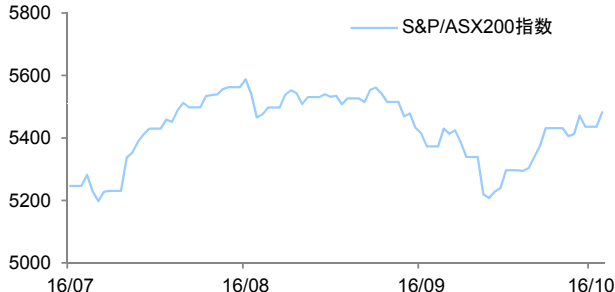
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	民間設備投資	4-6月	▲4.0%	▲5.4%	▲5.4%
9/1	小売売上高[前月比]	7月	0.3%	0.0%	0.1%
9/6	RBAキャシュレート		1.50%	1.50%	1.50%
9/7	GDP[前期比/前年比]	4-6月	0.6%/3.3%	0.5%/3.3%	1.0%/3.0%
9/8	貿易収支	7月	▲2700M	▲2410M	▲3250M
9/15	雇用者数変化	8月	15.0千人	▲3.9千人	26.2千人
9/15	失業率	8月	5.7%	5.6%	5.7%
9/20	RBA議事録				

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2820 ~ 1.3220
CAD/JPY 74.50 ~ 80.50

米州資金部 光野 由貴宏

■ 先月の為替相場

月初、ドル/カナダドルは1.3110水準でオープン。発表された米8月ISM製造業景況指数、非農業部門雇用者数変化、ISM非製造業景況指数(総合)が予想を大きく下回ったことから、9月利上げ観測が後退し、ドル売り流れに1.2850付近まで下落。その後も月末にアルジェリアで行われるOPEC会合期待にWTI原油が一時48.38をつけたこともカナダドル買い要因となり、ドル/カナダドルは月安値の1.2833まで下落。しかし9月カナダ中央銀行金融政策決定会合では、主要金利据え置きとなったが、ポロズ総裁が“どちらかというインフレ圧力は下のほうに傾いている”とハト派な発言があったこともあり1.3040付近まで急伸。

月中にかけては、ブレイナードFRB理事は講演で、金融政策を引き締める証拠は弱いと伝わり、米債利回りは下げ、ドル売りが強まり、ドル/カナダドルは1.3021まで下落。しかしその後、米債金利は反発する中、International Energy Agency (IEA)の月報で“供給過剰な状態が少なくとも2017前半まで続く”と発表したことや、イランの原油増産思惑もある中、46ドル台で取引されていたWTI原油が44ドルを割り込んだことから、カナダドル売りの流れが一時42.74をつけたことや、米8月消費物価指数(前月比)が予想を上回ったことからドル/カナダドルは1.3248まで上昇した。

月後半にかけて、9/21のFOMC会合を控えては1.32を挟んでの方向感の無い推移が続いたが、FOMC会合結果は金利据え置きとなり、その後のイエレン議長の見解でも“今回はさらなる経済指標を検証するために待つことにした”と、年内利上げについては特段普及しなかったことや、ドットチャートの下方修正を受けてドル売りが強まり、1.3000まで下落。しかし発表されたカナダ7月小売売上高、8月消費者物価指数が予想を大きく下回るとドル/カナダドルは1.3160まで値を戻した。

月末は、28日にOPEC会合にて日量3250万～3300万バレルに制限することが合意されたことを背景にドル/カナダドルは1.3048まで急落。その後、堅調な米4～6月期GDP(3次速報)を受けて1.32付近まで値を戻すが、カナダ8月GDP(前期比)が予想を上回ったことからカナダドル買いが優勢となり、1.3127でクローズした。

■ 今月の見通し

今月のドル/カナダドルは軟調な推移を予想。カナダドル買いの要因としては、OPEC非公式会合で原油減産の合意したことから、次回11月に行われるOPEC会合まで原油は買いが優勢となるであろう。また今月に入りリスク材料のひとつであった独大手銀行の米司法省の制裁額が当初の予定より大幅削減で合意に近いとの見方があることから、市場ではリスクセンチメントの改善が見られるであろう。最後に、ここ数か月軟調であったカナダの経済指標はカナダ7月GDPが予想を上回ったこと、またエネルギーセクターが予想以上に堅調であったことから、いくらかの懸念は払拭されるであろう。

そしてドルも、FOMC年内1回利上げが織り込まれており、FRBからのドル買い要因はあまり出てこない予想。気をつけたいのは米大統領選挙の討論会においてのリスクセンチメントの悪化リスクや、引き続き弱いカナダの経済指標には注意していきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

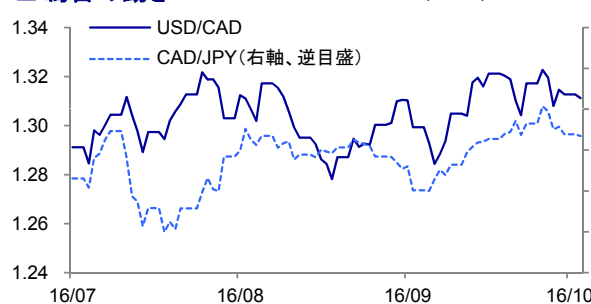
『当地のクリスマス事情』
カナダ、特にトロントはアメリカ以上に多民族国家なので、それぞれの文化によってクリスマスの扱いがだいぶ違ってきます。欧米系の人であれば、クリスマスは実家に帰り、家族と一緒に七面鳥、ハム、マッシュドポテト、野菜のムニエルなどを食べながら過ごすものです。しかし、イスラム系・中華系の人々はクリスマスでない限りはクリスマスに対して特に拘りはありません。イスラム系にとってはイード(犠牲祭)が私達でいうクリスマスだそうです。カナダではクリスマスは祝日なのですが、パキスタン系カナダ人の友達はクリスマスに出勤し、祝日手当の2.5倍の給料をもらって喜んでいたので印象的です。

私は彼女がキリスト教なので、去年のクリスマスは教会で過ごしました。ただ、韓国系の教会なのでトッポギ、タンソンユクなどの韓国料理を食べながらのお祝いとなりました。それと、教会ではクリスマスに洗礼(キリスト教入信の儀式)が行われます。ただ教会によって洗礼のやり方が違っており、執行形態は主に浸礼(全身を水に浸す)・灌水礼(頭部に水を注ぐ)・滴礼(手を濡らし、頭に押し付けて水に沈める所作を真似る)の3種類があるそうです。彼女が行った教会では滴礼が行われており、数滴の水を頭にかけるだけと、思ったよりシンプルな内容でした。私が高校時代に滞在したノバスコシアの教会では浸礼が行われ、湖で全身を水に浸かります。冬場なので尋常でなく寒そうでしたが、参加者は皆清々しい顔をしていました。私は現在キリスト教ではありませんが、もし入信するなら浸礼したいと思います。

日本ではあまり意識されませんが、クリスマスは元来キリスト誕生を祝う行事です。デートなどでロマンチックなムードを楽しむのもいいですが、もし興味があれば、入信せずともクリスマスにキリスト教について学んでみるのも、割りと通なのではないのでしょうか。(カナダ支店: 森 泰然)

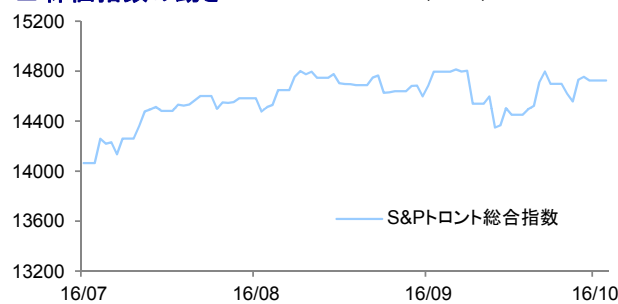
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	RBCカナダ製造業PMI	8月		51.1	51.9
9/7	カナダ銀行翌日物貸出金利	9月	0.50%	0.50%	0.50%
9/9	失業率	8月	7.0%	7.0%	6.9%
9/9	雇用ネット変化率	8月	14.0 k	26.2 k	-31.2k
9/23	小売売上高(前月比)	7月	0.1%	-0.1%	0.0% r
9/23	消費者物価指数(前月比)	8月	1.4%	1.1%	1.3%
9/30	GDP(前月比)	7月	0.3%	0.5%	0.6%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW 1070 ~ 1130
 KRW/JPY 8.93 ~ 9.39
 JPY/KRW 10.65 ~ 11.20

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

ソウル資金室 山口 智裕

■ 先月の為替相場

9月のドル/ウォンは、4か月続落。FOMCに関する思惑で上下したが、FOMC後に下落して引けた。

月初旬のドル/ウォンは下落。月初1日のドル/ウォンは、前月末比+1.2の1116.0で取引を開始。1日のISM製造業景気指数、2日の雇用統計、6日のISM非製造業景気指数などの米8月重要経済指標が軒並み市場予想を下回る低調な結果となったことを受けて、米利上げ観測が後退。ドルが下落する中、ドル/ウォンは米雇用統計後の週明け5日から下げ幅を拡大。7日には8月につけた年初来安値を更新し、月安値となる1089.7まで下落した。ややタカ派となった8日のECB理事会後にはユーロやドルが上昇。9日の韓国中銀(BOK)金融通貨委員会では市場予想通り政策金利が据え置かれた。李BOK総裁の記者会見はタカ派的であったが、FOMCなどを控えて影響は限定的であった。

月中旬のドル/ウォンは上昇。9日の海外市場でのローゼングレイン・ボストン連銀総裁のタカ派な発言や韓国の秋タ(チュソク)連休を控えて、ドル/ウォンが1120近辺まで上昇。12日のブレイナードFRB理事の発言はハト派なものとなったものの、FOMCや日銀金融政策決定会合を控えて連休中にもドルが上昇したこと、ドル/ウォンは連休明けの19日に月高値となる1126.9まで上昇した。

月下旬のドル/ウォンは下落。21日には日銀金融政策決定会合の結果発表を前に一旦1110近辺まで低下したものの、ドル/円が上昇する中、FOMCを控えて再度1120台まで戻した。注目されていたFOMCの結果は、反対票が3票入るなどメンバー間の意見の相違が見られたものの、市場予想通り政策金利が据え置かれた。しかし、メンバーの政策金利見通しが大幅に引き下げられたことなどを受けて、ドルが下落。22日のドル/ウォンは1100近辺まで下落して取引を開始した。月末週には独大手銀行への懸念などから欧州銀行株が軒並み下落し、リスクセンチメントが悪化する中、ドル/ウォンは下げ幅を縮小する場面も見られたものの、四半期末で実需関連のウォン買いフローが優勢となる中、前月末比▲13.5ウォン高の1101.3で引けた。

■ 今月の見通し

10月のドル/ウォンは、引き続き上値の重い展開が予想される。

9月のFOMCでは利上げが見送られたほか、政策金利見通しも大幅に引き下げられたことから、10月に金融環境が急速に引き締まる可能性は低いと思われる。また、11月に米大統領選を控えており、ドル高が警戒されやすい地合いが継続すると考えている。

BOKの金融政策に関しては、家計負債に対する懸念に重点が置かれるなど、追加金融緩和のヒントは見られていない。また、下期の経済減速は懸念されているものの、遅れていた補正予算に関しては8月末に国会を通過した。かかる中、年内の利下げ観測が一段と後退している。

米国、韓国のファンダメンタルズに鑑みると、引き続きウォンが大幅に弱含む場面は想定しにくい。ただし、欧州銀行や原油価格に対する懸念が再発する場合、突発的なリスクオフが起こる可能性などもあり、留意したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のクリスマス事情』

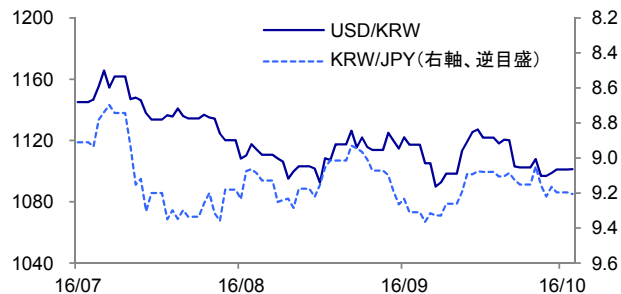
当地では、24日は恋人がいる人は日本と同じく恋人と過ごす人が多く、25日は家族で過ごすという方が多いように感じました。

ただ、何しますかと聞くと、「当然教会に行きます。」(当地の宗教は、カトリックとプロテスタントが過半数)という方、「クリスマスはソジュ(韓国焼酎)ではなく、ワインを飲む日です」(当室の酒豪)という方、「家で終わるのをじっと耐え忍ぶ」(独身の方)など、様々な受け止められ方をしているようです。

今がちょうど3か月くらい前ですので、もし韓国にいらっしゃる方がいれば、有名デパートや有名ホテルでは綺麗なイルミネーションが登場しますし、南大門市場などではクリスマスグッズが安く購入できます。また、外は寒いですが、観光地であるミョンドンや当行ビル近くのチョンゲチョンでもライトアップを見ることができます。

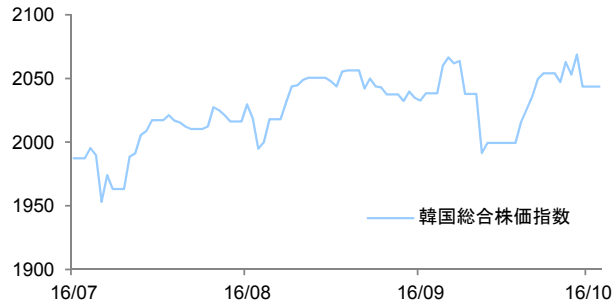
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	消費者物価指数(前年比)	8月	0.70%	0.40%	0.70%
9/1	輸出(前年比)	8月	-0.50%	2.60%	-10.20%
9/1	貿易収支	8月	\$5391m	\$5303m	\$7792m
9/1	日経韓国PMI製造業	8月	--	48.6	50.1
9/2	GDP(前年比)	2Q	3.20%	3.30%	3.20%
9/9	韓国銀行7日間貸し率		1.25%	1.25%	1.25%
9/13	失業率(季調済)	8月	3.60%	3.80%	3.60%
9/29	消費者信頼感	9月	--	101.7	102.0
9/30	鉱工業生産(季調済/前月比)	8月	-0.60%	-2.40%	1.40%
9/30	日経韓国PMI製造業	9月	--	47.6	48.6

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 30.75 ~ 32.00
TWD/JPY 3.00 ~ 3.38

台北資金室 辻野 順治

■ 先月の為替相場

9月のドル/台湾ドル相場は、米9月利上げ期待の後退、台湾中銀(CBC)の利下げ見送りなどの材料により、小幅台湾ドル高となった。

9月のドル/台湾ドル相場は、31.70台半ばでオープン。1,2日は、米8月雇用統計を控え、一進一退。5日は、前週末発表の米8月雇用統計が市場予想を下回ったことで、ドル安/台湾ドル高となり、31.50台へ。6日も、新型スマートフォン期待による台湾株式相場の上昇により、31.40付近へ。7日には、前日発表の弱い米8月非製造業景況指数を受けたドル安により、31.20付近まで台湾ドル高が進行した。8日も同水準での取引となったものの、9日は、株式市場の下落もあり、取引終盤には31.50付近まで台湾ドル安。10日は、翌週の中秋節休暇の振替営業日となったが、前日のイエレンFRB議長の講演を受けたドル高により、31.60台まで台湾ドル安が進んだ。

12日には、外国人投資家の株式売り越しにより、もう一段の台湾ドル安となり、31.70台へ。13,14日は同水準での取引が続いた後、15,16日は中秋節祝日。19日は、台湾株式の大幅上昇かつ外国人投資家の買い越しも膨らんだことで、31.40付近まで台湾ドル高が進行。前週末発表の米8月消費者物価指数(CPI)が市場予想を上回り、ドルが上昇していた中で、珍しく台湾ドル主導の動きとなった。

20,21日はFOMCを控え、ドル/台湾ドルは31.30～31.40台での動き。22日はFOMCを受け、一旦31.10台まで台湾ドル高となったものの、先行して台湾ドル高が進んできたこともあり、結局は31.40付近へ値を戻した。23,26日は、方向感なく31.40を中心として一進一退。27,28日は、台風により臨時休業。29日は、台湾休日中に韓国ウォン高が進んでいたことも意識され、一旦、31.20台半ばまで台湾ドル高が進行したものの、前日のイエレン議長の議会証言を受けた年内米利上げも意識されたことから、結局は、31.30台半ばまでの小幅台湾ドル高に止まった。30日は、欧州系金融機関への懸念から、オープン直後は、31.40台での取引となるも、前日のCBCの政策金利据え置きも意識され、結局は31.30台前半へ小幅台湾ドル高で終わった。

■ 今月の見通し

9月のドル/台湾ドル相場は、ドル次第の展開を見込む。

台湾経済統計は、7月統計は冴えなかったものの、8月統計では再度、改善を示し、輸出受注や鉱工業生産は強い結果となった。また新型スマートフォンの順調な滑り出しが伝わる中、台湾加権指数は年初来高値を更新。但し、株式市場への外国人投資家資金流入は、6～8月の月間平均1,066億台湾ドルと比べ、9月は25億台湾ドルと、僅かな流入に止まっており、楽観ムード一色とはなっていない。

今月の台湾ドル相場は、引き続きドル次第の状況が続く見込み。米利上げ期待が高まる場合は、ドル高に加え、米国株式市場の調整により、台湾株式市場からも外国人投資家資金が流出している。逆に米利上げ期待が後退する場合は、ドル安に加え、台湾株式市場へ外国人投資家資金が流入してきている。ドルの価値変動だけではなく、株式市場での外国人投資家の資金動向も影響するため、台湾ドル高、台湾ドル安のいずれの方向も値動きが大きくなっており、注意が必要だ。従来、方向感が出た場合も日次では0.1刻みの動きという印象だったが、最近では、1日で0.3程度動くことも珍しくない。今後の米経済統計を見極めたうえで、年内の米利上げ有無が織り込まれていく過程にあり、引き続きドル動向が最大の材料となるだろう。なお、欧州系金融機関の信用不安は心配の種。ユーロ売りによる相対的なドル高、株価下落などに繋がれば、米利上げ観測とは関係なく、相場が動いてしまうため、注視したい。

さて、先月のCBCの定例会合にて、政策金利据え置きが決定された。直前に、中銀総裁が議会報告において景気が回復基調であるとの見方を示すなど、地均しがなされていたことや、9月中旬には、先んじて台湾ドル高が進んでいたこともあり、据え置き決定翌日の台湾ドル相場は小幅な動きに止まった。但し、据え置きは台湾ドル高材料となる見込み。ドル安になっても、台湾ドル高の動きをCBCが阻止するという考え方は通用しにくく、台湾ドル高方向でも、大きな動きとなる局面もあるだろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のクリスマス事情』

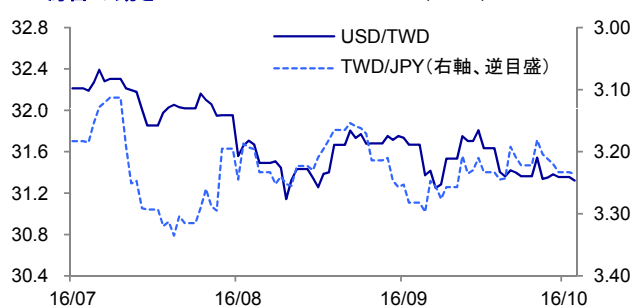
12月に入った頃から、商業施設やホテルなどに行くと、大きなツリーや、装飾があり、クリスマスの雰囲気が出始めます。ただ、商業的な行事という印象が強く、信仰を持って、お祝いしているという感じは全くありません。12月25日が過ぎても、しばらくツリーが置かれたままというのは珍しくなく、以前、正月にホテルへご飯を食べに行ったら、大きなツリーとともに、サンタとの記念写真イベントが行われていました。

またクリスマスなら”これ”をするという点が弱い点、伝統行事と比べると、クリスマスの印象は弱い点です。旧正月前などは、コンビニでも紅包、特大サイズのお菓子が並んだり、中秋節では月餅、端午節なら粽と、行事に紐付いた”これ”がありますが、当地のクリスマスは、特にケーキというわけでもなく、大々的に何かが売られているということもありません。

ということで、赴任以降、4回、クリスマスを迎えました。特に記憶が無いというのが率直なところ。もちろん、私自身、クリスマスだから、何かやろうと家族に言われないう、感度を極力、鈍くした状態で過ごしていることも一因かもしれませんが、”何かをしなくてはならない”という義務感を感じずに済むイベントと言えます。

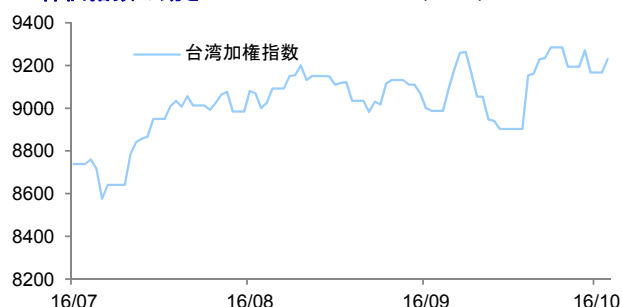
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/6	CPI(前年比)	8月	1.00%	0.57%	1.23%
9/7	輸出(前年比)	8月	0.30%	1.00%	1.20%
9/7	輸入(前年比)	8月	-4.30%	-0.80%	-0.20%
9/22	輸出受注(前年比)	8月	0.50%	8.30%	-3.40%
9/22	失業率	8月	3.99%	3.95%	3.96%
9/27	鉱工業生産(前年比)	8月	4.00%	7.74%	-0.31%
9/29	台湾中銀政策金利	4Q	1.375%	1.375%	1.375%

(資料) ブルームバーク

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7500 ~ 7.7650
HKD/JPY 12.60 ~ 13.30

香港資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【9月の香港ドル直物相場】

米ドル/香港ドルは7.754から7.760のレンジ内で推移した。前半はFOMCメンバーのタカ派的発言を受けて、米ドル高・香港ドル安の展開となったものの、結局利上げは行われず、金利見通しが引き下げられたことから7.754近辺まで香港ドル高となった。また、中国大手商業銀行が香港市場で74億米ドル規模の新規株式公開(IPO)を行い、申込期間を通して香港ドルの需要が高まったことも影響した。なお、米ドル/香港ドルフォワード1年物は一時▲41.25ポイントまでマイナス幅を縮小したが、その後▲200ポイント近くまで低下した。ドルLIBORが香港ドルHIBORを大きく上回っていることから、ドル調達のために為替スポット市場で香港ドルを売って米ドルを買い、フォワード市場で米ドルを売るという動きが引き続き見られ、フォワードポイントの低下圧力となった模様だ。

【9月の香港ドル金利】

指標金利である香港ドルHIBOR3か月物は0.58%近辺まで上昇した。インターバンク市場における流動性を図る指標である香港金融管理局(HKMA)の当座預金残高は、HKMAが資金吸収のために為替基金証券の発行を続けたことから2,600億香港ドルに減少した。また米ドルLIBOR3か月物が米MMF規制強化を目前にして7年ぶりの高水準である0.866%に達したことも香港ドル金利上昇の一因となった。このため香港ドルHIBORと米ドルLIBORの金利差は先月から引き続き、2010年以降のマイナス幅となる▲27bp前後で推移している。香港ドル金利スワップのイールドカーブは、FRBが利上げを見送ったことから大きくは動かなかった。米ドル・香港ドルのベシススワップについても、目立った起債案件がなく動意に乏しい展開となった。

【9月の香港株式市場】

ハンセン指数は中国本土からの資金流入により一時は年初来高値となる24,364ポイントまで上昇した。上海・香港証券取引所相互接続に伴う香港向け資金フローの投資枠は、月平均で40%近くが活用された。米9月利上げの懸念からハンセン指数は9日から12日にかけての1営業日で急落したが程なくして下げ止まった。FRBが利上げを引き続き保留し、中期的にはハト派的なスタンスを維持するも、株式指数は下落に転じた。その後、リスクセンチメントの改善を受けて、反発した。なお、上述の巨額IPOのロックアップにより株式市場の資金フローが滞る懸念は低いと思われる。

■ 今月の見通し

【10月の香港ドル直物相場】

米ドル/香港ドルは7.750から7.765を中心としてもみ合う展開を予想する。米利上げについて市場は年内1回と見込んでおり、FRBが中期的にハト派的スタンスを維持する中で、香港市場から大規模な資金流出が起きる可能性は低い。人民元相場と中国経済が比較的堅調である中、当面は香港ドルも堅調推移を予想する。但し、香港の次期行政長官選挙に向けて候補者が出馬の意向を示し始め、選挙に向けた議論が各地で盛り上がる事が予想される。選挙が終わるまでは不確実性が残り、香港ドル相場の攪乱要因となりうるだろう。

【10月の香港ドル金利市場】

香港ドルの短期金利は、当座預金残高が減少はしたものの依然として高水準であることから、ほぼ横這い推移すると思われる。同残高は2015年後半から減少を続けているものの、HKMAは流動性維持のために必要であれば為替基金証券の発行ペースを遅らせることができるため、香港ドルの流動性環境について懸念すべき状態にないと思われる。加えて、FRBのハト派的スタンスや安定した人民元相場により、香港からの資金流出は当面起こりそうにない。なお、米MMF改革導入後の米ドルLIBORの動きが注目される。もし、米ドルLIBORが低下に転じれば、米ドル/香港ドルフォワードは1年物を中心に上昇に転じるだろう。

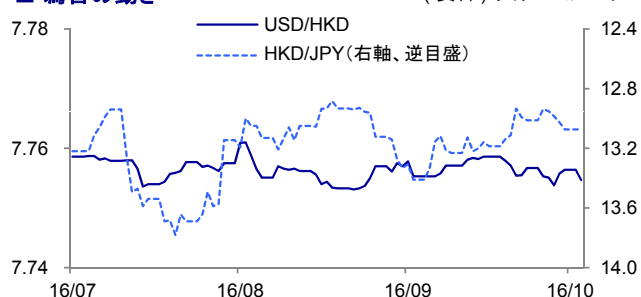
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のクリスマス事情』

香港のクリスマスは大規模なものであり、人々は何でもやりたいことをする時間を確保できる。香港で最も長い連休の一つであり、街は喜ばしい雰囲気にあふれる。「東洋の真珠」と称される香港が真価を発揮するのはこの時である。ビクトリア湾沿いのビル群から煌びやかな光が放たれ、多くの観光客を魅了する。人々は素晴らしい港の眺めを堪能したり、蘭桂坊(読み:ランカイフォン、香港随一の繁華街)でクリスマスを祝って盛り上がりたりする。彼らは踊り、酒に酔い、非日常の雰囲気のカウントダウンを行う。通常の香港とは異なった印象を受けるはずである。一方で香港市民の中にはこの機会に海外旅行に行く人々もいて、行き先としては日本、欧州、タイが特に人気である。

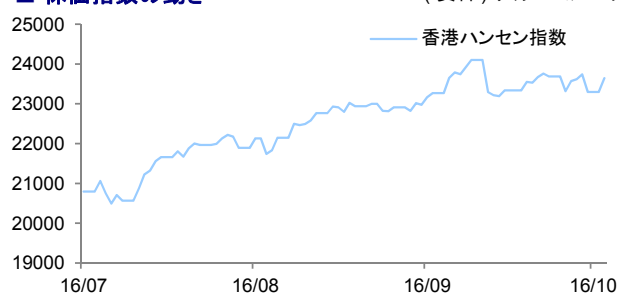
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/5	日経香港PMI	8月	--	49.0	47.2
9/7	外貨準備高	8月	--	\$362.7b	\$362.9b
9/13	PPI前年比	2Q	--	0.4%	-2.8%
9/19	失業率(季調済)	8月	3.4%	3.4%	3.4%
9/20	総合利率	8月	--	0.25%	0.26%
9/22	CPIコンボジット(前年比)	8月	2.3%	4.3%	2.3%
9/27	輸出(前年比)	8月	-2.0%	0.8%	-5.1%
9/27	輸入(前年比)	8月	-1.0%	2.8%	-3.3%
9/27	貿易収支	8月	-30.0b	-32.1b	-33.3b

(資料) ブルームバーク

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	6.5800	~	6.7800
	CNY/JPY	14.31	~	15.96
	100JPY/CNY	6.3300	~	6.9900

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 上城戸 千尋

■ 先月の為替相場

【為替相場】

9月のドル/人民元相場は、月初は中国・杭州でのG20を背景に安定推移。月末にかけては日銀の金融政策決定会合やFOMCなどの重要イベントや10月1日からの人民元SDR構成通貨入りを控え6.67付近で推移する展開となった。月初、ドル/人民元実勢相場は6.68付近でオープン。4、5日に杭州G20が予定されていたことから、当局が人民元為替相場を安定的に推移させるとの思惑を背景に、ドル/人民元は6.68を挟むレンジでの推移。6日に発表された米8月ISM製造業景気指数が6年ぶりの低水準となるドルインデックスが下落。ドル/人民元実勢相場も6.66台まで人民元高が進行。その後、FRB高官の発言を受けた米利上げ観測の高まりからドル買い優勢の展開となり、再び6.68付近まで人民元安が進む。8日にはオフショア人民元市場金利CNH HIBOR翌日物金利が前日比3.8%超上昇。2016年1月と同様オフショア人民元金利を高めに誘導し、人民元売りポジション保有者へのけん制を狙ったとみられる処置がとられた。オフショア人民元市場では人民元買い圧力が高まり、オンショア人民元市場もつられる形で人民元高基調での推移となった。中国の連休(中秋節)明けの19日、CNH HIBOR翌日物は前日比15%超上昇し、23%を超える金利水準となったが、オンショア人民元市場への影響は限定的。21日には日銀が追加緩和決定したことを受け、ドル高円安の動きからドルインデックスは上昇。ドル/人民元もやや人民元安へ進むも、すぐに中資系銀行から介入と思しき人民元買いフローが入り、一段の人民元安とはならず6.67台前半で推移。その後も10月1日からのSDR構成通貨入りを控え、ドル/人民元は6.67付近での横ばい圏での推移が続いた。

【金利相場】

月初は比較的安定的に推移するも、月半ばから税金の払い込み資金や中秋節、10月1〜7日の国慶節休暇を前にした資金需要の高まりから、流動性はややタイト化。金利が若干上昇する場面が見られた。月初から国慶節越えを意識した1か月物の資金調達ニーズ、9日以降は中秋節休暇越えの1週間物の資金調達ニーズが顕在化。流動性はややタイトな状況が継続。一部金融機関がSHIBORを上回る金利水準で翌日物の資金を調達する動きも見られた。しかし、連日の公開市場操作を通じて大規模な資金供給が行われたほか、人民銀行から特定の金融機関へ資金供給が実施されるなど、当局が市場の安定を図る姿勢が見られ、流動性も徐々に改善。

■ 今月の見通し

【為替相場】

10月1日からのSDR構成通貨入りや10月24〜27日に行われる第18期中央委員会第6回全体会議(六中全会)から、当局は重要イベント前後の為替相場が大きく人民元安に推移することを避けると考えられ、ドル/人民元相場は安定推移することが見込まれる。9月下旬のドル/人民元相場は6.67レベルで動意に乏しい展開となった。中国では10月1〜7日が国慶節のため長期休暇に入る。そのため、休暇明けはこれまで動きが少なかった反動もあり、一時的に相場が大きく動く可能性がある。しかし、六中全会を控え、当局の意向から極端な人民元安へ進むことはないだろう。外部要因としては引き続き米利上げの可能性と米大統領選が注目ポイントとなる。ドルを含め他通貨の動きに影響を受ける人民元だが、当局による人民元売り外貨買いに対する厳しい規制が維持されており、人民元相場の安定を志向する当局の姿勢が表れている。

【金利市場】

四半期末でもある9月末の資金需要を乗り越え、10月は安定した相場を見込む。中国人民銀行(PBoC)は引き続き公開市場操作や中期貸出ファシリティ(MLF)を通じて資金供給を行い、相場の安定を図るものと思われる。しかし、9月は上海銀行間金利(SHIBOR)翌日物金利が緩やかな上昇を続けている。オフショア市場でも9月にCNH HIBORが急上昇しており、人民元金利市場の動静には注意を要する。

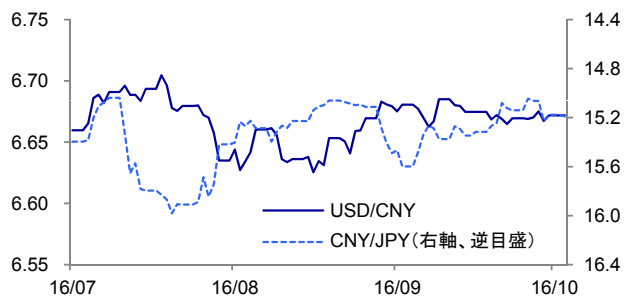
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のクリスマス事情』

中国のクリスマス、独身の人は、恋人と過ごしたり、友人と一緒に少し豪華なディナーに行ったりする日で、家族とゆっくり過ごすという風潮はなく、その点は日本と似ています。日本ではクリスマスにチキンを食べる人が多いと思いますが、中国にもフライドチキンのチェーン店はたくさんあるものの、クリスマスにチキンを食べるのは一般的ではありません。クリスマスケーキだけは必ず食べます。ちなみに、中国のケーキはとっても甘く、たくさんの生クリームでデコレートされている物が多いです。クリスマスといえばプレゼントですが、基本的に男性から女性へ贈るもので、女性は何も用意しなくても大丈夫です。中国は日常で女性に花を贈ったりする印象があり、贈り物も男性から女性へが多いです(バレンタインも同様です)。また、サンタさんから子供への贈り物もあるようです。クリスマスのイルミネーションは、派手好きの国民性もあり豪華で綺麗なのですが、クリスマスを過ぎてもイルミネーションがそのままになっているのはご愛嬌。家の近所の飲食店でも、窓にはいまだにMerry Christmasの文字とサンタのペイントが残ったままです。細かいことは気にしません。

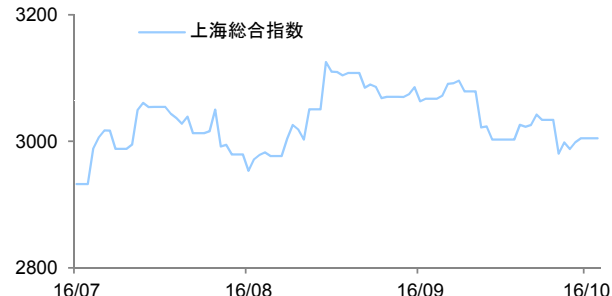
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	製造業PMI	8月	49.8	50.4	49.9
9/8	貿易収支(RMB建)	8月	373.00B	346.03B	342.80B
9/8	輸出(RMB建)(前年比)	8月	2.9%	5.9%	2.9%
9/8	輸入(RMB建)(前年比)	8月	0.7%	10.8%	-5.7%
9/9	CPI(前年比)	8月	1.7%	1.3%	1.8%
9/9	PPI(前年比)	8月	-0.9%	-0.8%	-1.7%

(資料) ブルームバーク

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3500 ~ 1.3750
SGD/JPY 73.00 ~ 76.00

アジア・オセアニア資金部 鈴木 教子

■ 先月の為替相場

シンガポールドル(SGD)相場は、4月以降、持ち合い相場が続いているが、9月も1.34台前半から1.37近辺で方向感の定まらないレンジ取引となった。

1日は、米国、日本でデリバティブ取引のマージン規制が導入されたことに纏わる不透明感からSGDは1.36台前半で軟調に推移。しかし、同夜に発表された米8月ISM製造業景気指数が6か月ぶりに景気判断の分岐点である50を下回ると、ドル売りの流れとなり、SGDは反発した。翌2日は、米8月雇用統計で非農業部門雇用者数の伸びが鈍化したことを受けて、発表直後こそドルが急落したが、米連休を控えて一方的なドル売りとはならなかった。

翌週は、6日に米8月ISM非製造業景気指数が予想を大幅に下回り、6年半ぶりの低水準となった。弱い米経済指標が続き、9月は利上げ見送りとの方が強まる中で、ドルが急落し、SGDも7日には月間の高値となる1.34台前半まで上昇した。しかし、8日には欧州中央銀行(ECB)が追加緩和を見送った前後から、流れはドル買いに転じた。更に9日には、ハト派と見なされていたローゼン格林・ボストン連銀総裁が「利上げを先延ばしすることはリスク」と述べたことでドルが一段高となり、SGDは1.36近辺まで反落して越えた。

翌週12日はイスラム教祝日でシンガポール市場は休場だったが、複数のFRB関係者が利上げに慎重な発言を行ったことで、SGDが1.35台半ばに反発する局面もあった。しかし連休明けの13日は、世界の株式市場が不安定な値動きとなる中、アジア株も一斉に下落。原油相場も軟調推移する中でリスク回避が強まり、SGDも1.36台後半まで売られた。週後半も引き続きSGDが弱含みの展開となり15日には3か月ぶり安値である1.37近辺をつけた。またST株価指数も月間の安値をつけた。

翌週19日はFOMC、日銀金融政策決定会合の二大イベントを控えて様子見姿勢が強まる中、イベント前のポジション調整でSGDは反発。21日は、まず日銀の金融政策決定会合でマイナス金利の深堀りがなかったことや、新たに導入された「金利ターゲット」の効果が不透明としてドル売りの反応となった。FOMCでは金利は据え置かれ、またメンバーによる金利見通しが前回に比べてより緩やかな金利上昇を予想していることを示すと、ドルが続落した。この流れの中でSGDは1.36近辺から1.35台前半まで上昇したが、週後半はイベント終了後のポジション調整から若干SGD安の流れとなった。

26日の大統領候補のTV討論会は、世論調査ではクリントン候補が優勢となるも、SGDの反応は限定的となり、その後も1.36近辺のレンジ内で推移している。

■ 今月の見通し

10月のシンガポールドル(SGD)相場は、材料難から持ち合い相場の継続を予想する。

10月の最重要材料は、第2週に予定されているシンガポール通貨庁(MAS、中央銀行)の通貨政策発表である。4月の見直し時には、SGDの名目実効為替レート(NEER)のSGD高誘導を停止して市場参加者を驚かせた。今回も、足元の輸出が依然として低調であることや、コアCPIが低水準にあることを材料に、一部ではNEERバンドをSGD安方向にシフトする実質的なSGD切り下げを行うとの予想もある。しかし大方の参加者はMASが現状の政策を継続すると見ており、我々の見方も同様である。4月の政策変更から日が浅く、また世界経済・金融市場に追加緩和を必要とする程の変化も無かったことから、SGD切り下げによる資金流出、国内金利の上昇などのリスクを冒しても一段の緩和を行う必要性はないと考える。よって、MASの発表前に、思惑から若干SGD安に振れる可能性はあるが、レンジを抜ける程の動きにはならないと見ている。また同じく第2週に発表予定の7~9月期GDP速報値にも注目が集まる。

海外要因として、米金融政策動向は依然としてSGD相場にとって重要材料であるが、大方の参加者は大統領選直前の利上げはないだろうと見ており、よって10月は米経済指標を材料に相場が大きく動くことは無さそうだ。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

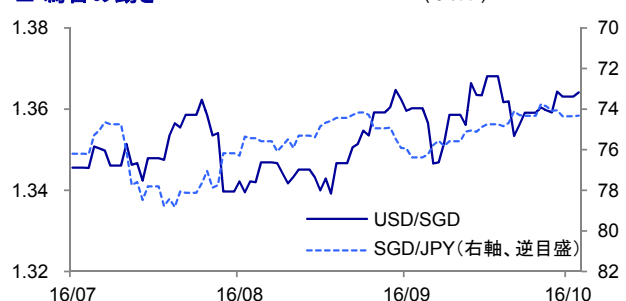
『当地のクリスマス事情』

シンガポールのクリスマスって何だろうと考えたのですが、1年中真夏の気温で熱帯気候の当地では季節感は当然無し。もちろん、ホワイトクリスマスというオシャレな事象もあり得ず。うーん、某サイトで確認してみたら…「夜景」「グルメ」「ショッピング」の3つだそうです。「夜景」:確かにキレイです。メインストリートのオーチャードロードではきらびやかな装飾が施され、交差点には大きなクリスマスツリー。ぼーっと歩いても飽きない感じですよ。観光スポットのマリーナエリアでも、各ホテルの入り口には大きなツリーが用意され、なかなかナイスなスポットになります。「グルメ」:多くのレストランでクリスマスのスペシャルコースが用意されます。特にホテルのクリスマスビュッフェは豪華かつデザートも美味しく選ぶのに悩んでしまうほど。チキンやローストビーフの王道も楽しめますが…当然お値段はシンガポール…結構お高いです。「ショッピング」:夏場に開催されるグレート・シンガポール・セールに次ぐ大きなセールです。ブランドショップ・デパート・ショッピングモールと様々なところでディスカウントセールが開催されます。“Up To 50% off”等の広告がお店の入り口に貼ってありますが、コートではなくもれなくTシャツ等が買えます(笑)。

ふと思ったのですが、、暑いという1点を除いては銀座と変わらないような気がしないでもないクリスマスです、、(鳥場)

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/2	購買部景気指数	8月	49.4	49.8	49.3
9/2	電子産業指数	8月	-	50.2	49.7
9/15	小売売上高 (前年比)	7月	1.4%	2.8%	1.3%
9/16	非石油輸出 (前年比)	8月	-3.3%	0.0%	-10.6%
9/23	CPI (前年比)	8月	0.4%	0.5%	-0.3%
9/26	鉱工業生産 (前年比)	8月	0.5%	0.1%	-3.5%

タイパーツ相場

予想レンジ: USD/THB 33.70 ~ 35.00
THB/JPY 2.80 ~ 3.00

バンコック資金室 関 浩士

■ 先月の為替相場

● 9月のドル/パーツは軟調に推移

月初のドル/パーツは34.62パーツで取引を開始。8月消費者物価指数(CPI)は前年比+0.29%の上昇となり、市場予想を下回ったものの反応は限定的。2日発表された米8月雇用統計では非農業部門雇用者数変化、平均時給の伸びとともに市場予想を下回る結果となると、一時34.57パーツまで売られた。週明け5日以降、SET指数が急落する展開にパーツ売りが優勢となると6日には34.82パーツまで上昇したものの、米8月ISM非製造業景況指数が市場予想を大きく下回ると米利上げ期待の後退から、7日には月間安値となる34.57パーツまで下落した。8日にはタイ株SET指数が9月末を控えた利益確定の動きと見られる売りが広がったことで急落する展開となると、パーツ売りが広がり、ドル/パーツは34.80パーツまで上昇。9日は、一部報道により、次回の日銀政策決定会合にて、一段の利下げ観測が強まると、ドル/円が上昇する動きに連れ、ドル/パーツも34.86パーツまで上昇した。

12日にはSET指数が下げ幅を拡大するとパーツ売りが加速し、一時34.96パーツまで上昇。その後はFRB理事の講演での発言を材料にドル売りが進むとドル/パーツは再び34.80パーツ台へ値を戻した。13日には、「日銀、緩和拡大はマイナス金利軸に」とのヘッドラインを受け、日本の追加緩和期待にドル/円が上昇する展開となると、ドル/パーツは底堅い推移となり、海外時間には月間高値となる34.97パーツまで上昇。14日に開催された、タイ中銀(BOT)の金融政策決定会合(MPC)では、市場予想通り11会合連続となる政策金利の据え置き(1.50%)が発表されると、パーツは買い戻しが進み、34.87パーツまで下落。19日にはウィラタイBOT総裁が「パーツは他のアジア通貨と同様の動きをしており、ボラティリティを高める要素はない」と発言。日銀、FOMCの結果待ちで神経質な値動きの中、ドル/パーツは株式市場への資金流入を背景に34.79パーツまで上値重く推移した。

21日、日銀金融政策決定会合では追加緩和策が発表され、一時的にドル/円が上昇する展開に34.85パーツまで上昇。しかし、FOMCでは予想通り政策金利が据え置かれ、12月の利上げを強く意識させる内容でもなかったことからドルが売られる展開となると、22日には34.60パーツまで下落。日米のイベントを通過後は、34.60パーツを挟み膠着。27日、米大統領選候補者による討論会ではクリントン氏優勢との見方が大勢ではあったものの、ドル/パーツ相場への影響は限定的。独大手銀行の信用不安報道を背景にリスク回避姿勢が進行すると月末に掛け、ドル/パーツは34.70パーツ台へ上昇した。

■ 今月の見通し

● 10月のドル/パーツは上値重い展開を予想

9月に開催されたMPCでは、政策金利の据え置き(1.50%)が全会一致で決定した。声明において、民間消費の力強い拡大や公共支出を背景に4～6月期のGDP成長率が予想以上と評価。2016年のGDP見通しを従来の+3.1%から+3.2%に上方修正したものの、民間設備投資は低迷が続いており、工業生産や輸出もASEAN諸国の経済低迷を背景に縮小していると指摘。今回の結果の背景については、タイ経済が依然として脆弱な世界経済の景気回復や主要先進国の金融政策動向などといった大きな不確実性を内包しているため、政策の余地を確保する必要性から政策金利の維持を決定したとしている。声明文のトーンを素直に受け取ると、11、12月に控える年内のMPCにおいても政策金利が維持される公算が高く、タイ国内の経済動向を要因としたタイパーツ買いの材料は乏しい。

一方、9月に中銀会合が各国で行われたが、日銀は「長短金利操作付き量的・質的金融緩和」の導入を決定。銀行・保険株を筆頭に日経平均株価が上昇すると一旦は円安で反応するも、マーケットでの消化が進み、結局は円高に逆戻りした。FOMCでは利上げを主張するメンバーが前回の1人から3人に増えたものの、メンバーの金利見通しを示すドットチャートは下方修正され、イエレンFRB議長の見会でも12月の利上げのヒントが得られなかったことから、2大中銀の会合は結局ドル買いイベントとはならなかった。日銀の緩和姿勢の継続、FRBの緩やかな引き締め姿勢を確認したことで、タイをはじめとした新興国諸国に資金が流入する流れは継続しそうである。パーツ売り要因となっていたタイ株式市場の下落が一旦落ち着いており、ドル/パーツの上値は重くなっている印象。ウィラタイBOT総裁からも、パーツ高を牽制する発言は聞かれず、ドル/パーツは上値重い展開を予想している。

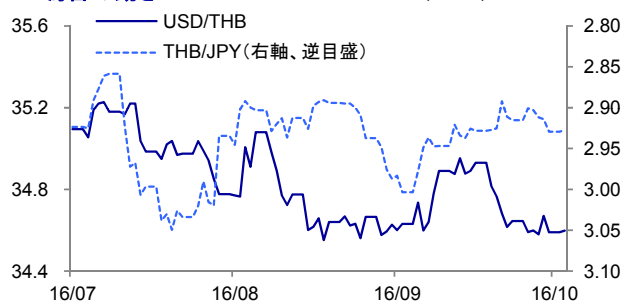
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のクリスマス事情』

バンコクでも12月になると、街中はクリスマスの飾り付けが始まります。ホテルやデパートは派手な電飾が飾られ、夜には写真大好きなタイ人の恰好の撮影スポットとなり、このクリスマスの飾り付けは大抵年明けまで続きます。子供にクリスマスプレゼントを買うという習慣も日本同様ですが、タイ人はラッキードローというくじ引きでのプレゼント当選が大好きで、店内のパーティー等では延々とこのくじ引きが続きます。バンコック資金室でも、毎年この時期にくじ引きでプレゼント交換が行われます。役職毎に予算の金額が設定され、飲食品以外の物という縛りで自由に各自がプレゼントを持ち寄り、くじ引きによるプレゼント交換が実施されます。昨年は希望する商品が、紙に書いて貼られ出しておりましたが、Gold、ビデオ、友達などと好き勝手な事が書かれていました。女性が多いだけに毎年このプレゼントは頭を悩ませますが、どう見ても予算オーバーな純金のブレスレットから、読み終わった古本までバラエティーに富んだプレゼントが登場します。昨年、私は携帯電話で撮った写真をインスタントカメラの「チェキフィルム」に出力できるプリンターをプレゼントした代わりに、ハローキティの弁当箱を持って帰りました。(関)

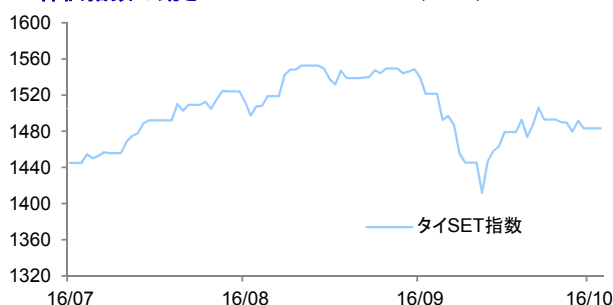
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	CPI (前年比)	8月	0.43%	0.29%	0.10%
9/8	消費者信頼感	8月	-	73.20	72.50
9/14	MPC(タイ中銀指標金利)	9月	1.50%	1.50%	1.50%
9/26	輸出 (通関ベース/前年比)	8月	-1.00%	6.54%	-6.38%
9/26	輸入 (通関ベース/前年比)	8月	-4.00%	-1.48%	-7.16%
9/26	通関貿易収支 (USD)	8月	\$1267M	\$2128M	\$843M
9/30	製造業生産指数	8月	-1.8%	3.1%	-5.0%
9/30	設備稼働率指数	8月	-	64.4	62.4
9/30	経常収支	8月	\$3218M	\$3805M	\$3667M

マレーシアリング相場

予想レンジ: USD/MYR 4.05 ~ 4.25
MYR/JPY 23.00 ~ 25.00

アジア・オセアニア資金部 宮地 崇

■ 先月の為替相場

先月のリング相場は、4.08台前半でオープン。5日には、前週に発表された米8月雇用統計の結果から、FRBによる9月の利上げ観測が後退しややリングが買い戻された。しかし、相次ぐ米金融当局関係者からの早期利上げに前向きな発言を背景にドルがやや選好される展開となり、4.08台での上値の重さを確認。7日には、マレーシア中銀金融政策決定会合が開催され政策金利の据置が発表されるも、大方の予想通りであった為、市場の反応は限定的となった。8日には、中国8月貿易収支が予想比良好な内容であったことから、リングは先月の高値となる4.04台前半まで上昇。しかしながら、米国の早期利上げ観測が再燃したことに加え、連休前のポジション調整も手伝い、9日には4.06台後半まで軟化した。

12日は、ハリヤ・ハジでマレーシア休場。翌13日に、リングは4.08台でギャップダウンして取引開始。原油価格が継続して弱含んだことからリングは軟調な値動きを示現。15日にはマレーシア国債価格の下落も手伝い、4.15台半ばまで続落。16日は再びマレーシア休日で、マーケットは休場となった。

月半ばに入ると、19日には、堅調なアジア株の動向を背景にリングは4.12台後半まで上昇。しかし、原油価格が軟調に推移すると反落。20日は、日銀金融政策決定会合、米FOMCを控えて4.14台を方向感なく推移。21日にはマレーシア8月消費者物価指数が予想比強目の数字となるも、相場への影響は限られた。しかし、その後発表された日銀金融政策決定会合の結果からドル円が上昇する動きに、リングもやや売られ4.16台半ばと先月の安値を示現。ところが翌22日には、前日の米FOMC後のドル売りから、リングは4.10台中盤にて窓を開けてオープン。週末にかけて、やや上値は抑えられ4.12台前半まで小緩んだ。

月末週の26日には、前週末にOPECにおける減産合意の期待感が後退し原油が下落した流れを受け、リングも4.14台前半まで軟化。ところが、28日にOPEC非公式会合にて原油減産で合意との報道に、翌29日のリングは4.10台前半と大きくリング高方向でギャップオープン。しかし、30日には独大手銀行を巡る懸念等を背景にリングは売られ4.14台後半でクローズした。

■ 今月の見通し

先月発表されたマレーシアの経済指標は総じて弱い内容となった。まず、7月の輸出額が前年同月比-5.3%とマイナス転。また、同じく7月のマレーシアの鉱工業生産についても、+4.1%と前月の+5.3%から低下。さらに、マレーシア8月の製造業PMIも47.4と引き続き50を下回る水準が長期化している。8月に発表された第2Q GDP成長率も+4.0%と、近年では最低水準の伸びを示していることに加え、足許の経済指標の状況を踏まえるとマレーシア経済はまだ本格的な回復軌道に乗ったとは言い難く、経済環境はリングの上値を抑える要因となる。

また、以前はアジア諸国の中で資源国として同グループに分類されていたインドネシアにも、景況感で水をあけられる格好となっており、対インドネシアルピアでもリングの上値は重い。先月インドネシア中銀は利下げを実施したものの、足許絶対金利水準の高いインドネシアルピアの方が選好されやすい地合と思われ、相対的にリスクオンモードとなってもリングは買われづらい状況か。

加えて、先月7日にマレーシア中銀の金融政策決定会合にて政策金利の据置を決定したものの、マーケットでは引き続き利下げの思惑は燻っている。対照的に年内利上げの思惑が根強く残る米国との金利面でギャップ拡大は否めず、こちらも当面リングの重石となろう。

一方、リングの為替市場のボラティリティはじわじわと鈍化しており、足許は昨年の夏場以前のレベルまで下落している。市場がやや落ち着きを取り戻している証左と考えられ、リングが急落するような雰囲気は感じられない。さらに原油価格もOPECの8年ぶりの減産決定を受け、当面下値が底堅くなることが想定されるなか、こちらもリングの下値をサポートしよう。

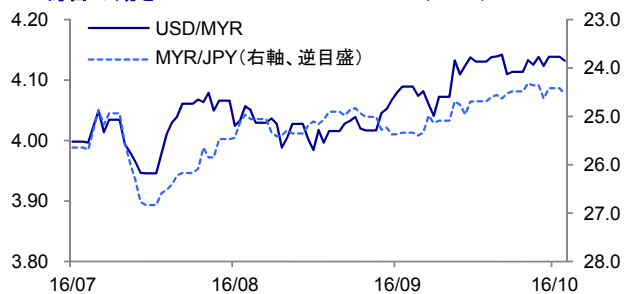
上記の各材料を踏まえると今月のリング相場は一方方向に売られるような展開とはならないものの、ファンダメンタルズを踏まえると買い進む地合とも思われず、引き続き上値の重い展開が続こう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のクリスマス事情』
マレーシアは国教をイスラム教と定めてはいるものの宗教の自由は認められており、中華系マレーシア人を中心に国民の約20%がキリスト教徒です。国民構成がマレー系、中華系、インド系の大きく3つに別れ、各々の人種がイスラム教、キリスト教、ヒンズー教を各々信仰している(ほぼ)こともあって、それぞれの宗教の祝日がマレーシアにはあります。ただ、これは残念といっているのか分かりませんが、キリスト教系の祝日は1つしかありません。それがクリスマスです(イースター、サンクスギビングも休みだったら、)。そんなこともあって少なくとも中華系マレーシア人の比較的多い地域や都心部ではショッピングモールを中心にクリスマスの飾り付けが派手に行われ、中には特大的なクリスマスツリーが建てられます。さすがマレーシア、異教に対しても寛大というか、商売つ気が凄いいつか、いや単に日本と似たような感じで宗教とか関係なく、クリスマスの雰囲気を楽しんでいるのかもしれませんが(噂では某首相がインタビューを受けた際に「メリークリスマス」と回答したとかしないとか)。ではその雰囲気とは何か。ここで一番の違和感を覚える訳ですが、やたらめったら雪をあしらった飾りだったり、ソリを引きずるトナカイが多いのです。きっとこれは南国で1年中暑く、雪に憧れているからなのではないでしょうか(変に南国仕様になっていてどうか、とも思います)。何れにしてもそのクリスマスツリーも大概年明けまで置いたままであつたりと雑な感じは否めませんが、クリスマステーストのカフェでビールを飲んでいてと何処からともなくコーランが聞こえてくる、というなかなか経験できないインチュエーションを味わえる暑いマレーシアのクリスマスシーズンを是非味わってみてください。(マレーシアみずほ 山田)

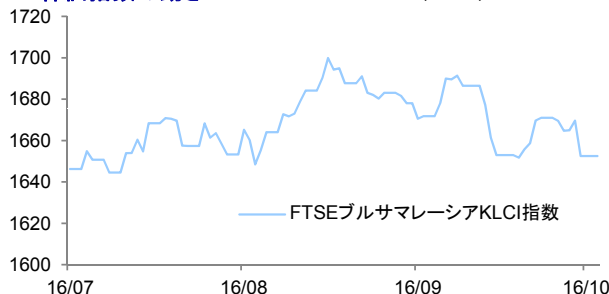
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/7	輸出 (前年比)	7月	1.9%	-5.3%	3.4%
9/7	輸入 (前年比)	7月	-1.5%	-4.8%	8.3%
9/7	貿易収支 (MYR)	7月	4.25b	1.91b	5.52b
9/7	BNM翌日物政策金利	-	3.00%	3.00%	3.00%
9/9	鉱工業生産 (前年比)	7月	4.5%	4.1%	5.3%
9/21	消費者物価指数(前年比)	8月	1.3%	1.5%	1.1%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 12700 ~ 13200
 IDR/JPY 0.73 ~ 0.81
 JPY/IDR 124.00 ~ 137.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

インドネシアみずほ銀行 河合 良介

■ 先月の為替相場

9月のドル/ルピアは、月半ば上昇する場面も見られたが、米利上げ見送り・租税恩赦法絡みの資金流入を背景に、13000割れ。1年5か月ぶりの安値へ。

月初、13260近辺でスタートしたドル/ルピアは、2日に発表された米8月雇用統計が市場予想を下回ると、9月米利上げ観測が後退、ドル/ルピアは13055近辺まで下落。

月半ば、世界的に株式市場が冴えない状況となると、リスクオフ地合いから、13240近辺まで上昇する場面も見られたが、注目のFOMCで米利上げ見送りが決定されると、ルピア高トレンドへ回帰し、再び13100割れの展開。

また、翌日開催されたインドネシア中銀金融政策決定会合において、7日物リバースレポレートへ政策金利指標が変更されて以降、初の利下げを決定した。しかし、市場はインドネシア景気浮揚のサポート材料と、ポジティブに反応し、13000台前半へ下落。

月末にかけては、輸入企業によるドル買い需要も相応に見られたが、当初低調だった租税恩赦(※)に絡む納付金額が目標の約25%に達していること、第1段階の期日が当初の9月末から12月末に延長されたとの報道を好感し、ルピア買いが加速、27日には1年5か月ぶりの12900台前半までルピア高が進行している。(9月28日取引終了時点)

※租税恩赦: インドネシア政府が、過去に海外へ流出した資金をインドネシア国内に呼び戻すために、来年3月まで、過去の脱税による訴追を行わず、納税義務を一部免除する法案を6月に可決。段階的に軽減税率が上がる仕組みになっている。

■ 今月の見通し

今月のドル/ルピアは、ルピア堅調な展開を予想する。

8月中旬、イエレンFRB議長のタカ派な発言を受けた米金利引き上げ期待の高まりは、その後冴えない結果となった米経済指標を受け剥落。結局、9月米FOMCにて、金利据え置きが決定され、また、FOMCメンバーによる来年の政策金利見通しも下方修正されている。

12月米FOMCにおける利上げ期待は、既に市場ではある程度織り込まれており、ドルルピアの上昇圧力は限定的となろう。

一方、国内に目を向けると、不調と報道されていた税恩赦絡みの納税額が、9月下旬に入り政府目標額の25%に達し、また第一段階の期日が当初の9月末から12月末に延長されたことを市場は好感。9月下旬に、インドネシアルピアが、1年5か月ぶりの高値をつけたことに鑑みると、租税恩赦絡みの資金流入は継続することが見込まれ、ルピア堅調な展開を予想する。

一方で、独大手銀行の問題など、市場のセンチメントを悪化させる可能性がある問題も燦々していること、インドネシア中銀が過度なルピア高を望んでいないことから、下値も限定と見ている。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のクリスマス事情』
 私は、インドネシア在任中、2度のクリスマスを経験しましたが、お祭りごとの好きな国民性からか、クリスマス前は結構な盛り上がりでした。夜な夜な爆竹みたいな音のする花火が上がっていました(正月だったかな?)。

私が一番困ったのは、日本からの物品の輸送期間が読めないことによる、子供のクリスマスプレゼントへの対応でした。

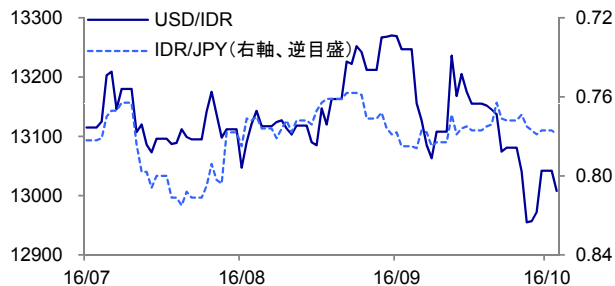
各玩具メーカーさんも、この時期に照準を合わせ、新商品を発表するためか、子供達のリクエストも日々ベースで変わります。

1回目の2014年は、発注時期が遅れクリスマス当日にプレゼントが間に合わず、2回目の2015年は、前年の反省を踏まえて、早めに発注したものの、発注後に子供達がリクエストを変更したいと言いだし、無理やりリクエストの変更を却下する、という対応を迫られました。

お父さんたちはというと、クリスマスイブイブぐらいに、普段のビール・焼酎をワインに変えて、ささやかに(?)、お祝いしていました。

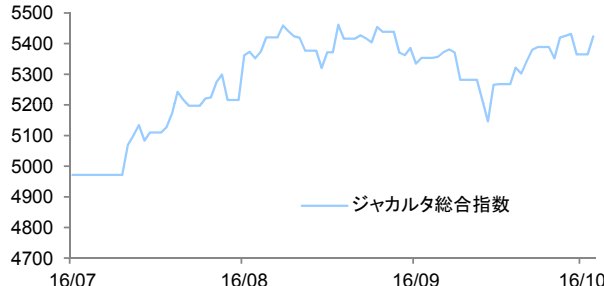
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	CPI(前年同月比)	8月	3.02%	2.79%	3.21%
9/7	外貨準備高(USD B)	8月	-	113.54	111.41
9/15	貿易収支(USD M)	8月	500	298.00	514.00
9/22	BI 7daysリバースレポ金利		5.00%	5.00%	5.25%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 47.50 ~ 49.50
PHP/JPY 2.05 ~ 2.12

マニラ支店 樋上 陽一

■ 先月の為替相場

9月のドル/ペソ為替相場(オンショア・インターバンク市場)は7年ぶりのドル高ペソ安水準に。

月初(2日)に発表された米8月雇用統計は市場予想比悪化、発表前に高まっていたドル金利の先高観が剥落。5日はペソ高での取引開始を見込んでいた。

しかしながら週末にミンダナオ島ダバオ市での爆発事件を受け、ドゥテルテ大統領が全土に無法状態を宣言したこと、6日の朝には、米オバマ大統領がラオスで8日に開催される東アジアサミットに合わせ、6日午後に予定していたドゥテルテ大統領との会談をキャンセルする、と米国家安全保障会議のブライス報道官が発表したことから米比関係悪化を嫌気したフィリピン売りが優勢となる。

国内の治安問題、米比関係悪化の内部要因に加え、アジア株式市場が軟調推移したこと、米10年債金利の上昇などの外部要因もありペソ安が大幅に進み、15日には7月OFW(海外在留フィリピン労働者)送金が市場予想対比で悪化したこともあり、ドル/ペソ(オンショア・インターバンク市場)は1ドル＝48ペソ手前でFOMCを迎える。

FOMCの結果を受けてドル買いの圧力がやや落ち着くも、26日の週初取引開始は、2016年のレンジ上限である1ドル＝48ペソをあっさり抜けて7年ぶりのペソ安水準へ。

22日のフィリピン中銀(BSP)金融政策委員会では市場予想通り政策金利据え置きとなった。BSPは今年のインフレ率予想を1.7%に下方修正(前回1.8%)。一方、2017年、2018年はそれぞれ2.9%と2.6%で据え置いた。

月初から進むペソ安に当局者からは牽制する発言が聞かれ、介入と思しきフローも見られる。

(現地時間28日21:00現在)

■ 今月の見通し

10月については、引き続きペソ安が継続するものと予想。ペソ安速度が落ち着くかに注目したい。

9月28日現在、外国人のフィリピン株売買動向は6週連続の売り越しとなっている。直近週の売り越し金額は縮小しているものの、年初より大幅な買い越しを記録していただけに反動は大きそうだ。

外部格付機関S&Pもフィリピンの格付けをトリプルBで維持するも新政権のリスクを指摘。市場は政治リスクを完全に嫌気しており、センチメントが簡単に改善するとは思えない。

当局関係者からは、ペソの為替レートについてはファンダメンタルを反映すべきとのコメントがあり、ペソ安に警戒が示されている。また、介入と思しきフローも見られるが大きく為替水準を変えるような介入ではないため、トレンド変化は期待できそうにない。

市場参加者は何がキッカケでペソが買えるか材料探しをしている。見つからない限りはペソ売りで臨むしかないといったスタンスか。

米国の年内利上げ観測が根強いのもドル高ペソ安要因。利上げによるリスクオフとなれば、ペソ安が加速度的に進むリスクも頭に入れておきたいところ。そうなった場合の当局対応も気になるところ。

9月のBSP金融政策委員会で政策金利が据え置きとなり、今年中の政策変更は現時点ではないとの見方が優勢。国内金融市場はペソの流動性が極めて高く、BSPが導入した期間物金利の導入は現時点では効果が出ていない。過剰流動性吸収のための新たなアプローチはいつ発表されてもおかしくないと思っているものの、相場が落ち着かないとアクションは取りづらいつと思われる。

(現地時間28日21:00現在)

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のクリスマス事情』
当欄をご愛読いただいている皆様は、今月がなんで“クリスマス”か不思議に思われているかもしれません。

ここに書くネタは各拠点の執筆者が持ち回りでネタ出しすることになっており、今月のネタ出しは小職。

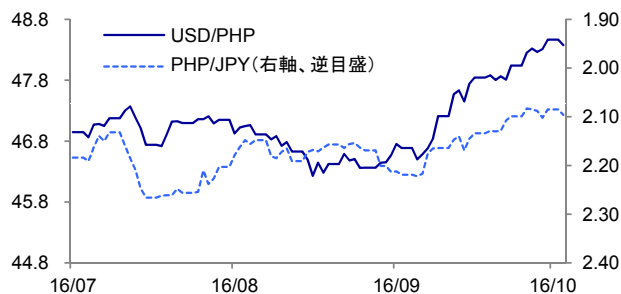
気は早いとは思いつつも、当地はBERの月からクリスマスが始まります。SEPTEMBER、OCTOBER…、つまりもう始まっているんです。

店先ではカウントダウン、あと90日って…
ショッピングモールではクリスマスソング。
9月のペソ安のように、今後、加速度的にクリスマスモードが高まって行くんだそうです。

一大消費シーズンを前にこの国を支えるOFWにとっては、ペソ安はありがたいはずですが。

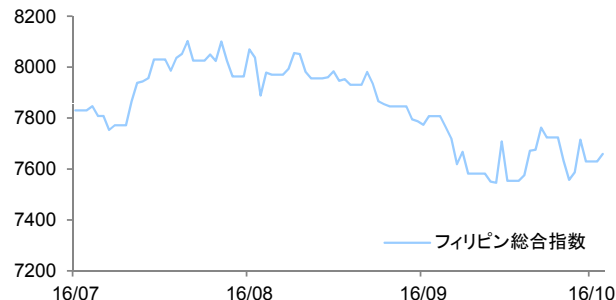
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記コメントご参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 65.50 ~ 67.50
INR/JPY 1.43 ~ 1.58

アジア・オセアニア資金部 木原 達章

■ 先月の為替相場

9月のルピー相場は、対ドルで67台前半でスタート後、66台後半中心に揉み合い、66.6台でクローズ。

8月31日のインド市場引け後に発表された印4～6月期GDPが、前年比+7.1%と市場予想(同+7.6%)を大きく下回ったことを受け、月初、ルピーはギャップを開け、67台前半まで売られオープン。

その後、米国経済指標の弱さを受けたドル売りの動きから、ルピーに買い戻しが入り、7日には66.3台まで買われるも、米国FRB高官発言を受けたドル買いの動きで、再び67近辺まで売られた。

12日のインド市場引け後に、印8月消費者物価指数(CPI)、印7月鉱工業生産が発表され、CPIが食料品価格の低下などから、市場予想(同+5.20%)を下回る同+5.05%となったが、鉱工業生産は同▲2.4%と、市場予想(同+1.4%)を大きく下回る結果となり、13日のインド市場休場明けの14日、ルピーは67を超えてスタート。

その後、FOMCを控え、66台後半中心のレンジ推移となるも、21日のインド市場引け後に発表された印4～6月期経常収支の赤字幅が前年よりも大幅に縮小したことや、同日NY時間のFOMC政策金利据え置きを受けたドル安の流れがルピーを押し上げ、66.50割れまで上昇。

29日、カシミール地方でインド軍がパキスタンの武装勢力に攻撃を行ったとのニュースで66.9台までルピーが下押しするも、すぐに反発し、結局66.6台で終了。

■ 今月の見通し

10月のルピー相場は、引き続き米国の利上げ動向など外部要因に左右され易いものの、インド国内の構造改革に進展が見られていることから、相対的に底固い展開を予想。

CPIが、RBIの2017年3月の目標(+5%)近くまで低下しており、追加利下げ期待が高まりつつある。利下げはインド経済・株式市場をサポートするルピー相場のプラス材料と認識されている。

RBIは、10月4日の会合から、従来の総裁が副総裁などの助言を受けて決定する方式から、金融政策委員会を設けて多数決で決定する方式になる見込みであり、政府が9月22日に3人の金融政策委員会メンバーを発表し、RBIからのバテル新総裁を含む3名と併せ、6名のメンバーが確定した。

ラジャンRBI総裁時代の金融政策スタンスが、今後も継続されるとの見方が強まっており、またGST導入に向けた進展、インフレーション・ターゲットの正式導入発表など構造改革に進展もあり、ルピーは相対的にしっかりした値動きになると予想。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のクリスマス事情』

インドのクリスチャンは、人口の5%未満。近年高級ホテルやショッピングモールには大きなツリーが飾られるようになってきたが、町の様子はあまり変わることがなく、盛り上がりには欠ける印象だ。

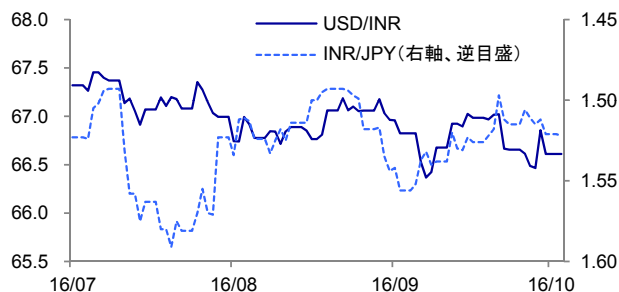
若者が多い職場では、シークレットサンタというプレゼント交換が行われる。くじ引きでプレゼントの贈り先を確定し、その相手にプレゼントを購入する。プレゼント交換の日には名前を書いたプレゼントを持参し、相手が喜ぶ様子を眺め、おもむろに「私からよ」と挙手するのだ。

支店のスタッフに、クリスマスを祝うかと聞いてみた。「自分の宗教ではないから、全く祝わない。考えたこともない(24歳独身男子ほか数名)」。「俺たちは母だけがクリスチャンだ。朝から母さんは教会に行くよ。俺にとっては自宅でツリーを飾って、うまいものを食べてラム酒を飲む日だね。飲みに出かけて友達とワイワイ騒いだりもするよ(31歳既婚男子)」。「自宅で洋酒たっぷりのフルーツケーキを焼く(33歳既婚男子)」。「家族全員で教会に行く日だよ(クリスチャン既婚男性)」

インタビューした相手は決まって「キミもクリスマスには我が家においでよ」と招待してくれる。インドらしい温かさ顔がほころんだ。(バンガロール支店・木原志乃)

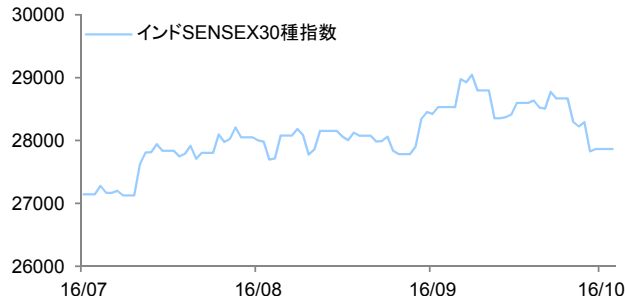
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

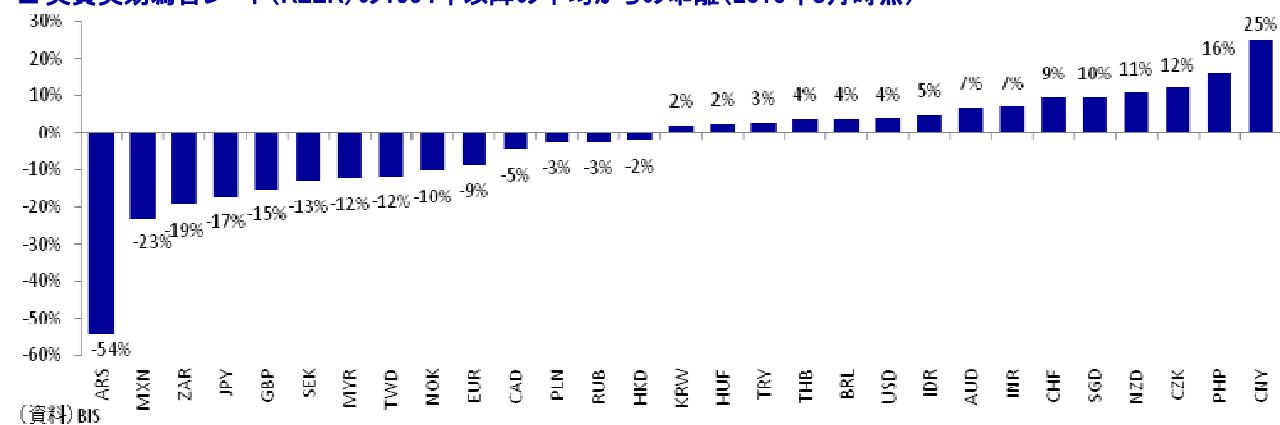
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	日経インドPMI製造業	8月	-	52.6	51.8
9/5	日経インドPMIサービス	8月	-	54.7	51.9
9/5	日経インドPMIコンポジット	8月	-	54.6	52.4
9/12	消費者物価指数(前年比)	8月	5.20%	5.05%	6.07%
9/12	鉱工業生産(前年比)	7月	1.4%	-2.4%	2.0%
9/14	卸売物価(前年比)	8月	4.00%	3.74%	3.55%
9/15	貿易収支	8月	-\$ 7.0B	-\$ 7.7B	-\$ 7.8B
9/15	輸入(前年比)	8月	-	-14.1%	-19.0%
9/15	輸出(前年比)	8月	-	-0.3%	-6.8%

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2015年末	2016年9月末	騰落率	株式市場	2015年末	2016年9月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	17425.03	18308.15	5.1%	-
日本	USD/JPY	120.22	101.35	-15.7%	日経平均株価	19033.71	16449.84	-13.6%	2.5%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0862	1.1235	3.4%	ドイツDAX指数	10743.01	10511.02	-2.2%	-2.2%
英国	GBP/USD	1.4736	1.2972	-12.0%	ロンドンFTSE100指数	6242.32	6899.33	10.5%	25.6%
豪州	AUD/USD	0.7286	0.7664	5.2%	S&P/ASX200指数	5295.9	5435.921	2.6%	-2.4%
カナダ	USD/CAD	1.3839	1.3127	-5.1%	S&Pトント総合指数	13009.95	14725.86	13.2%	19.3%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.4937	6.6718	2.7%	上海総合	3539.182	3004.703	-15.1%	-17.4%
香港	USD/HKD	7.7507	7.7564	0.1%	香港ハンセン	21914.4	23297.15	6.3%	6.2%
インド	USD/INR	66.1537	66.6113	0.7%	インドSENSEX30種	26117.54	27865.96	6.7%	6.0%
インドネシア	USD/IDR	13788	13042	-5.4%	ジャカルタ総合	4593.008	5364.804	16.8%	23.5%
韓国	USD/KRW	1175.06	1101.13	-6.3%	韓国総合株価	1961.31	2043.63	4.2%	11.2%
マレーシア	USD/MYR	4.2943	4.1385	-3.6%	ブルサマレーシアKLCI	1692.51	1652.55	-2.4%	1.3%
フィリピン	USD/PHP	46.905	48.467	3.3%	フィリピン総合	6952.08	7629.73	9.7%	6.2%
シンガポール	USD/SGD	1.4185	1.3631	-3.9%	シンガポールST	2882.73	2869.47	-0.5%	3.6%
台湾	USD/TWD	32.862	31.355	-4.6%	台湾加権	8338.06	9166.85	9.9%	15.2%
タイ	USD/THB	36.03	34.59	-4.0%	タイSET	1288.02	1483.21	15.2%	19.9%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2016年8月時点)



(資料) BIS

■ 実質GDP成長率

	2014Q4	2015Q1	2015Q2	2015Q3	2015Q4	2016Q1	2016Q2	2014	2015
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	2.3	2.0	2.6	2.0	0.9	0.8	1.4	2.4	2.6
日本*	2.2	5.0	-1.9	2.1	-1.7	2.1	0.7	0.0	0.6
ユーロ圏	1.2	1.8	2.0	2.0	2.0	1.7	1.6	1.1	2.0
英国	3.5	2.8	2.4	1.9	1.7	1.9	2.1	3.1	2.2
豪州	2.3	2.3	2.0	2.6	2.8	3.0	3.3	2.7	2.5
カナダ*	3.4	-1.0	-0.5	2.2	0.5	2.5	-1.6	2.5	1.1
エマージングアジア									
中国	7.2	7.0	7.0	6.9	6.8	6.7	6.7	7.3	6.9
香港	2.5	2.4	3.1	2.3	1.9	0.8	1.7	2.7	2.4
インド	6.6	6.7	7.5	7.6	7.2	7.9	7.1	7.2	7.6
インドネシア	5.0	4.7	4.7	4.7	5.0	4.9	5.2	5.0	4.8
韓国	2.7	2.4	2.2	2.8	3.1	2.8	3.3	3.3	2.6
マレーシア	5.7	5.7	4.9	4.7	4.5	4.2	4.0	6.0	5.0
フィリピン	6.7	5.0	5.9	6.2	6.5	6.8	7.0	6.2	6.3
シンガポール	2.8	2.7	1.7	1.8	1.8	1.8	2.1	3.3	2.0
台湾	3.6	4.0	0.6	-0.8	-0.9	-0.3	0.7	3.9	0.7
タイ	2.1	3.0	2.7	2.9	2.8	3.2	3.5	0.9	2.8

(注) インドの年間成長率は会計年度(4~3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	16/02	16/03	16/04	16/05	16/06	16/07	16/08	2014	2015
	(%)							(%)	
先進国									
米国	4.9	5.0	5.0	4.7	4.9	4.9	4.9	6.2	5.3
日本	3.3	3.2	3.2	3.2	3.1	3.0	3.1	3.6	3.4
ユーロ圏	10.3	10.2	10.1	10.1	10.1	10.1	10.1	11.6	10.9
英国	5.1	5.1	5.0	4.9	4.9	4.9		6.3	5.4
豪州	5.8	5.7	5.7	5.7	5.8	5.7	5.6	6.1	6.1
カナダ	7.3	7.1	7.1	6.9	6.8	6.9	7.0	6.9	6.9
エマージングアジア									
中国		4.0			4.1			4.1	4.1
香港	3.3	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.2	3.3
インドネシア	5.5							5.8	6.0
韓国	4.1	3.8	3.7	3.7	3.6	3.6	3.8	3.5	3.6
マレーシア	3.4	3.5	3.5	3.4	3.4			2.9	3.2
フィリピン			6.1			5.4		6.8	6.3
シンガポール		1.9			2.1			2.0	1.9
台湾	3.9	3.9	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	3.8
タイ	0.9	1.0	1.0	1.2	1.0	1.0	0.9	0.8	0.9

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	16/03	16/04	16/05	16/06	16/07	16/08	16/09	2014	2015
	(前年比%)							(前年比%)	
先進国									
米国	0.9	1.1	1.0	1.0	0.8	1.1		1.6	0.1
日本	0.0	-0.3	-0.5	-0.4	-0.4	-0.5		2.7	0.8
ユーロ圏	0.0	-0.2	-0.1	0.1	0.2	0.2	0.4	0.4	0.0
英国	0.5	0.3	0.3	0.5	0.6	0.6		1.5	0.0
豪州	1.3			1.0				2.5	1.5
カナダ	1.3	1.7	1.5	1.5	1.3	1.1		1.9	1.1
エマージングアジア									
中国	2.3	2.3	2.0	1.9	1.8	1.3		2.0	1.4
香港	2.9	2.7	2.6	2.4	2.3	4.3		4.4	3.0
インド	4.8	5.5	5.8	5.8	6.1	5.1		6.4	5.9
インドネシア	4.5	3.6	3.3	3.5	3.2	2.8		6.4	6.4
韓国	1.0	1.0	0.8	0.8	0.7	0.4		1.3	0.7
マレーシア	2.6	2.1	2.0	1.6	1.1	1.5		3.2	2.1
フィリピン	1.1	1.1	1.6	1.9	1.9	1.8		4.1	1.5
シンガポール	-1.0	-0.5	-1.6	-0.7	-0.7	-0.3		1.0	-0.5
台湾	2.0	1.9	1.2	0.9	1.2	0.6		1.2	-0.3
タイ	-0.5	0.1	0.5	0.4	0.1	0.3		1.9	-0.9

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2014Q4	2015Q1	2015Q2	2015Q3	2015Q4	2016Q1	2016Q2	2014	2015
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.2	-2.3	-2.4	-2.5	-2.5	-2.6	-2.7	-2.3	-2.6
日本	0.5	1.8	2.4	2.9	3.3	3.6	3.8	0.8	3.3
ユーロ圏	2.4	2.7	2.9	3.1	3.2	3.2	3.4	2.5	3.2
英国	-5.1	-4.8	-5.0	-5.0	-5.4	-5.4	-5.7	-4.7	-5.4
豪州	-2.9	-3.5	-5.2	-4.8	-5.5	-3.6	-3.8	-3.0	-4.7
カナダ	-2.3	-2.6	-2.8	-3.1	-3.2	-3.1	-3.4	-2.3	-3.2
エマージングアジア									
中国	2.7	3.3	3.2	3.0	3.0	2.6	2.4	2.7	3.0
香港	1.3	1.3	2.6	3.1	3.1	3.8	4.3	1.3	3.1
インド	-1.4	-1.3	-1.3	-1.1	-1.1	-1.1	-0.8	-1.4	-1.1
インドネシア	-3.1	-3.0	-2.5	-2.2	-2.1	-2.1	-2.1	-3.1	-2.1
韓国	6.0	6.7	7.0	7.7	7.7	7.9	7.8	6.0	7.7
マレーシア	4.4	3.5	2.7	2.5	2.9	2.4	1.9	4.4	2.9
フィリピン	3.8	4.2	4.1	3.4	2.6	2.2	1.1	3.8	2.6
シンガポール	17.4	19.3	19.9	19.3	19.8	18.9	19.9	17.5	19.8
台湾	12.2	13.3	13.2	14.2	14.6	14.4	14.7	11.8	14.6
タイ	3.8	4.6	5.7	7.3	8.2	10.3	11.1	3.8	8.1

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4~3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	(単位:bp)	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	0.25 - 0.50	引き締め: 2015/12/17	0.25 - 0.50	2015/12/17	25	2016/9/22	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2016/9/21	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5	2016/9/8	現状維持
英国	バンク・レート	0.25	緩和: 2007/12/6	5.75	2016/8/4	-25	2016/9/15	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	1.50	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/8/2	-25	2016/9/6	現状維持
カナダ	翌日物金利	0.50	緩和: 2015/7/15	1.00	2015/1/22	-25	2016/9/7	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp
インド	翌日物レポ金利	6.50	緩和: 2015/1/15	8.00	2016/4/5	-25	2016/8/9	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	5.00	緩和: 2015/2/17	7.75	2016/9/22	-25	2016/9/22	-25bp
韓国	7日物レポ金利	1.25	緩和: 2012/7/12	3.00	2015/6/9	-25	2016/9/9	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/7/13	3.00	2016/7/13	-25	2016/9/7	現状維持
フィリピン	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/5/16	3.00	2016/5/16	-100	2016/9/22	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	1.50	緩和: 2011/11/30	3.50	2015/3/11	-25	2016/9/14	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	6.50	緩和: 2012/3/12	15.00	2014/3/17	-50	2014/12/23	現状維持

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBIレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行